

平成 26 年 11 月 21 日
恵那市 明智振興事務所

木づかいガイドライン作成資料について

- 1 木づかいガイドラインの提案者・モニター・場所について
- 2 木づかいガイドラインの原稿依頼について
- 3 木づかい推進・木づかいガイドライン事業のための各市町村連携による予算化について
- 4 スギダラどこでもシリーズの製作内容について
- 5 スギダラ矢作川流域支部の発足及びコンセプトについて
- 6 スギダラキャラバンについて

木づかいガイドライン作成・活動方針（案）

1 木づかいガイドラインの提案者・モニター・場所について

提案者・モニター・場所についての考え方は下表のとおりとして、共通認識を持って、その役割を担う方・場所を選定したい

区 分	内 容
提案者	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに木づかいの実績のある方 ・その取り組みが将来的な木づかい推進に結びついている方 ・心から本心でその木づかいに取り組まれている方
モニター	<ul style="list-style-type: none"> ・その提案に対する見込客と考えられる方 ・その木づかい推進の中心的な対象（年代）と考えられる方 ・その方に教えると多面的な展開が期待される方
場所	<ul style="list-style-type: none"> ・その取り組みの実績がある場所 ・その取り組みを発信する際、中心的な方・組織の存在する場所 ・その取り組みの活動拠点が作れるところ
イベントの性格	<ul style="list-style-type: none"> ・木づかい需要創造イベント ・木づかい体感・センスオブワンダーイベント ・木の感謝祭イベント

2 木づかいガイドラインの原稿依頼について

木づかいガイドラインの原稿依頼については、次のとおり共通認識を持ちたい

- ・提案者は上記のモニターと一体となって、その取り組みを広げていく「木づかいの潮流」を意識して、原稿を作成する
- ・特にモニターを「見込客」と意識することから、モニターに何を感じてほしいか、興味を持ってもらいたい点は何か、を明確にして提案する

NO	原稿依頼者	テーマ	時期

3 木づかい推進・木づかいガイドライン事業の各市町村連携による予算化について ウッドスタート宣言

今後の「木づかい推進・木づかいガイドライン事業」を進め、木づかい推進による「地域森林資源の整備と活用」、「木づかい上下流連携によるフェアトレードの実現」、「木づか

い推進スタイルの確立による持続可能な地域づくり」等、実効性を高めるためには、矢作川流域圏懇談会に参加されている各県・市町村・関係団体の持続的・共通認識的な予算化による支援が必要と考えられる。

そこで、こうした各関係団体が「木づかい推進」の必要性を認識し、予算化しやすくするため、国土交通省及び「山部会からの提案＝各県の木づかい推進を願う市民」からの声として、矢作川流域圏懇談会に参加されている各関係団体へ「ウッドスタート宣言」を呼び掛け「木づかい推進・木づかいガイドライン事業」の予算化を要望していきたい。そのまとめ役は国土交通省とし、その内容（案）は以下のとおりである。

ウッドスタート宣言の事業内容

予算依頼者	事業名	ポイント
県	・木づかい推進活動拠点支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ・木づかい推進に必要な活動拠点となる施設・空間の提供・設置に対する支援 ・木づかい推進活動の「道の駅」利用に対する斡旋
市町村	・木づかい推進活動支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ・木づかい推進活動に必要な人件費・試作材料費・活動場所提供等に対する支援
団体	・木づかい推進事業	<ul style="list-style-type: none"> ・木づかい推進・普及を図るための独自予算化

4 スギダラ「どこでも～シリーズ」の製作内容について

山部会における木づかいガイドライン作成にあたり、今後多面的な活動が予想されることから平成 26 年 9 月 3 日の「全国スギダラケ倶楽部」の若杉会長の講演をきっかけに、「スギダラ矢作川流域支部」の設立及び支部長の任命が計られ、事務局を根羽村森林組合とし、支部長については山部会木づかいガイドライン担当の今村が担うことに決定された。再度、この決定について 10 月 17 日の山部会で再確認を行った。

すでに、木づかいについては根羽村がリーダー的な役割を担って欲しい、との意見もあることから、根羽村における木づかい推進活動については「スギダラ矢作川流域支部」としての活動としてもリンクさせたい。

そこで今後、根羽村における木づかい推進活動も「スギダラ矢作川流域支部」の活動に組み込み、市民の全ライフステージに関わるようなスギダラ（ヒノダラ・広ダラ）商品をモニターの意見を取り入れながらデザイン化して、「どこでも～シリーズ」として試作する。

販売については、スギダラ活動の精神である「誰でもどこでも製作販売できるオープン商品」としたいため、デザイン料を販売価格の 5%に設定してデザイン提供者に支払う形で、販売製作者を限定せずにスギダラ製品を流域内に広めていきたい。

矢作川流域圏懇談会ご提案・ご推薦

「人が居心地よく居られる場所・空間」づくりのためのスギダラ製品（案）

NO	製品名	内容
1	どこでも足湯	V1、V2
2	どこでも露天風呂	
3	どこでもブランコ	
4	どこでもピザ窯	ピザ窯用台座
5	どこでも屋台	KATARI-BAR、コンパクト屋台、連結決傘屋台、機内もつこみ屋台
6	どこでもウッドデッキ・ベンチ	杉太、高杉太、ちよいと一杯飲み杉太、タコ杉・イカ杉、タコマツ、イカマツ、コーンマツ、ノシマツ
7	どこでもなんでもテーブル	
8	屋外用どこでも読書イス机	
9	どこでも木の内装	
10	なんでも木の看板	
11	地元の木を使った木の家	

5 スギダラ矢作川流域支部の発足及びコンセプトについて

発足

「スギダラ矢作川流域支部」は、矢作川流域圏懇談会の山部会における木づかいガイドライン作成にあたり、今後多面的な活動が予想されることから平成26年9月3日の「全国スギダラケ倶楽部」の若杉会長の講演をきっかけとして、その当日に設立されました。支部構成員は矢作川流域圏懇談会に関連する木づかい推進活動者です。事務局は根羽村森林組合、支部長は、木づかいガイドライン担当者の今村に決定されました。

コンセプト

「スギダラ矢作川流域支部」は、「全国スギダラケ倶楽部」の活動趣旨に準じ、戦後の復興期に段階的に植栽されてきた矢作川流域のスギやヒノキを始めとする人工林をきちんと活用することにより、流域内の林産業や山村・里山に活力を生み出し、同時に、矢作川流域市民の全ライフステージを対象とした「スギダラ」活動による木づかいを推進することにより、市民生活の様々な場面における魅力的な生活空間を創造して「地域の人の輪」、「地域の元気」を生み出すことを目的とします。

注)「スギダラ活動」とは、流域内のスギ・ヒノキの人工林や広葉樹をきちんと活用して、あらゆる生活空間を「スギダラケ（ヒノキダラケ・広用樹ダラケ）」にする活動である。

6 スギダラキャラバンについて

「スギダラ矢作川流域支部」の発足に伴い、今後「スギダラ製品」の展示や木づかいイベントを流域内の公園、道の駅、保育園、小学校等の校庭等で開催し、そこに各森林組合、地元工務店、木材関連業者、地元企業、地元商店街、とよた森林学校の卒業生、地元の木のファン等がジョイント的に「木づかいに共感」を持って参加できるような「スギダラキャラバン」を定期的で開催し、地域を元気にする「人の輪」を作っていければと考えます。

また、木づかい推進活動を支援していただける各市町村や教育委員会等と連携して、実行者が余り大きな負担を感じることなく、流域市民の全ライフステージに渡って「木の魅力」を伝え、地元の生活空間を「人が居心地よく居られる場所・空間」にしていくスギダラ（ヒノダラ・広ダラ）活動に発展させていくきっかけづくりにしたいと思います。

全国的な市民運動となった「森の健康診断」や「木の駅プロジェクト」の成果と併せて、今度は「生活空間に木を使おう・木づかいライブ・スギダラキャラバン」を矢作川の地から発信できればと思います。

木づかいガイドライン 「さあ~しよう」のフォーマット (市民編案)

区 分		内 容			
さあ~しようのテーマ					
いつ					
どこで (位置図)					
内 容					
対象者					
対応する者					
面白い点 魅力的なところ					
必要な時間					
必要な金額					
準備するもの					
イメージ (映像)					
お薦めポイントは					
参加者からのレビュー					
対象年齢	衝撃度	神秘度	リピーター率	安全性	ステージ表

木づかいガイドライン 「さあ~しよう」のフォーマット（市町村編案）

区 分		内 容		
さあ~しようのテーマ				
内 容				
対 象 者				
対象者の条件				
魅力的なところ				
必要な時間				
必要な金額				
準備するもの				
イメージ（映像）				
お薦めポイントは				
利用者からのレビュー				
対象年齢	衝撃度	やってよかった度	他県普及性	市民貢献度

木づかいガイドライン 「さあ~しよう」のフォーマット（業界編案）

区 分		内 容		
さあ~しようのテーマ				
内 容				
対 象 者				
対象者の条件				
魅力的なところ				
必要な時間				
必要な金額				
必要なメンテナンス				
イメージ（映像）				
お薦めポイントは				
利用者からのレビュー				
対象年齢	衝撃度	やってよかった度	他県普及性	市民貢献度

木づかいガイドライン 「さあ~しよう」のフォーマット (研究者編案)

区 分		内 容		
さあ~しようのテーマ				
内 容				
対 象 者				
研究の魅力的なところ				
必要な時間				
事 業 費				
イメージ (映像)				
研究のお薦めポイントは				
研究者からのレビュー				
市民貢献度	衝撃度	おすすめ度	他県普及性	発展性

木づかいガイドライン 市民編A (案)

NO	内 容	提案者	モニタ ー	場所
1	弓矢づくりにチャレンジしよう	ネバリン	小学生	根羽
2	自分の好きな木のペンダントを作ってみよう	ネバリン	小学生	根羽
3	自分でマイお箸を作ってみよう	ネバリン	小学生	根羽
4	自分のお家の木の表札づくりチャレンジしてみよう	ネバリン	小学生	根羽
5	自分の好きな板をピカピカに磨いて自分だけの宝物にしてみよう	根羽小	大人	根羽
6	自分で薪を作ってドラム缶風呂を沸かし湯につかろう	ネバリン	小学生	根羽
7	木の葉っぱで部屋の匂いをよくしてみよう	根羽小	小学生	マイルーム
8	木のカルタ取りにチャレンジしよう	ネバリン	小学生	原っぱ
9	自分のマイツリーを見つけて名前をつけよう	丹羽	ファミ	恵那
10	いよいよ自分で森づくりにチャレンジしよう (サクラ山・花の山)	伐採者秀美	新婚	根
11	木の幹 (マイツリー) にハンモック (どこでもマイウッドデッキも) を吊るして涼しく昼寝してみよう・山の中のコーヒータイムを楽しもう	丹羽・ハンモック 2000	ファミ	恵那
12	ツリーハウスに遊びに行こう	豊中建設	ファミ	根羽檜原
13	自分だけの露天風呂と足湯を手に入れよう	ネバリン	女子	根羽檜原
14	自分のお風呂に木を浮かべて香りを楽しもう	根羽小	女子	お風呂
15	日本の代表 50 種の樹木を覚えよう (葉の標本づくりにチャレンジ)	豊田森組	大学生	豊田
16	自然の生き物観察場所の看板を立てよう	豊田森組	小学生	豊田
17	日本人なら木のお風呂のある温泉につかろう (中房温泉)	中房温泉 沖・松井	熟年・ 青年 (土 屋・長谷 川)	安曇野
18	チェンソーアートを学ぼう	ネバリン	青年	根羽
19	色々な木のおもちゃづくりや木工作にチャレンジしよう	ネバリン	父と子	根羽
20	きれいな川で遊ぼう	J TN	小学生	根羽
21	自分だけの滝に道を開けてマイナスイオンを浴びよう	こもれび	女子	根羽
22	木のある公園のウッドデッキで読書しよう (ブックレビューもつくろう)	ネバリン	読書人	安城
23	木と森のある素晴らしい大学に遊びに行こう (信州大学農学部ゆりのき)	信・名大生	高校生	信大・名大
24	筏 (ボート) で川下りにチャレンジしてみよう	筏隊・アル	中学生	岡崎・飯田
25	木のお店案内ブックをつくろう・木のアンテナショップに遊びに行こう	沖・松井	お仲間	流域内
26	スギダラチームの輪を広げて全生活空間をスギダラけにしよう	若杉・ 丹羽・今村	木の人	豊田駅・トヨタ 自・アイシング ループ・安城市
27	夜空を見上げ星と森の声聴こう	星と森の人	小学生	根羽森沢

28	木の科学実験で木を良く知ろう・木を使おう・木を楽しもう 輪っば弁当箱づくりにチャレンジしよう	根羽小・ 花野屋	小学生 ファミ	エコフルタウン 根羽
29	自分達の力で山の木を搬出して地域通貨を手に入れよう	南木	山親父	根羽・豊田
30	自分達の力で豊田から根羽まで縦走路を整備して休憩小屋を建てよう	山岳会・店	豊田隊	根羽・豊田
31	自分で取り組んだ森の健康診断を活用しよう	矢作川研	豊田人	豊田
33	木の小屋においでよ（中村好文さんと連携）	中村好文	開拓者	遊休農地

木づかいガイドライン 県・市町村編B（案）

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	山主森林経営講座に参加して自分の山を管理の仕方を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
2	森林自然観察リーダー入門講座に参加して自然観察の基本を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
3	間伐ボランティア初級講座に参加してチェンソーによる間伐を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
4	山主自力間伐講座に参加してチェンソーを使って自分の山を間伐しよう	豊田森組	豊田人	豊田
5	セミプロ林業作業員養成講座に参加して林業就業者を目指そう	豊田森組	豊田人	豊田
6	森林セミナーに参加して色々な森林を歩きながら森林管理を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
7	矢作川源流の森ウォーキングに参加して源流域の動植物を観察しよう	豊田森組	豊田人	豊田
8	夏休み昆虫観察に参加して森の生き物の生活や不思議さを体験しよう	豊田森組	豊田人	豊田
9	初めての間伐体験に参加して簡単にできる間伐を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
10	森林調査いろいろ学習会に参加して植生・林分・土壌調査の基本を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
11	「木づかい」いろいろ発見に参加して原木きのこの菌打ちを体験しよう	豊田森組	豊田人	豊田
12	森林の草花調べに参加して高原・山地・丘陵の草花を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
13	間伐してベンチの製作まで全工程を自分達で行い、公共施設に寄付しよう	豊田森組	豊田人	豊田
14	様々な山の助成金制度を活用して自分の山づくりに取り組もう	各森組	森林所有者	豊田他
15	様々な木の家づくりの助成金制度を活用して地元の木で家を建てよう	各県	お施主	各県
16	地元の木を使った住宅見学会に参加して地元の木で家を建てよう	各 県 ・ 工務店	お施主候補	各県
17	木造公共施設を訪ねて木の使い方を参考にしよう	豊田・ 根羽・工 務店	市町村	豊田・ 根羽
18	各地で取り組まれている間伐材利用事例を参考に矢作川流域材を活用しよう	各県	市町村	
19	根羽スギの家モデル住宅に体験宿泊して木の家を楽しもう	根羽村	お施主候補	根羽
20	長野県地域発元気づくり支援金事業に応募して皆のふるさとを作ろう	ネバリン	各 NPO	根羽
21	根羽村地域発元気づくり支援金事業に応募して皆のふるさとを作ろう	根羽村	村民	根羽
22	根羽スギ柱材 50 本無償提供事業を使って有利に根羽スギ住宅を建てよう	根羽	お施主	根羽

23	市町村有林を使って新しい森づくりにチャレンジしよう(伐採・造林一貫施業)	ネバリン	森林所有者	根羽
24	市町村有林を使って子供たちに間伐を教えよう	各森組	小中学生	全市町村
25	皆で憩いの森の木道・木橋づくりにチャレンジしよう	ネバリン	市町村	根羽
26	都市の中心部に緑の憩いの公園を計画してつくろう(豊田市・番外飯田市)	豊田飯田	市町村	豊田・飯田
27	長野県 信州型エコ住宅推進事業 50～80万円の助成を利用しよう	長野県	お施主	長野
28	長野県 信州型住宅リフォーム促進事業 20～50万円の助成を利用しよう	長野県	お施主	長野
29	岐阜県 産直住宅建設支援制度 105,000円相当の木材支給を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
30	岐阜県 ぎふの木で家づくり支援事業 20万円の助成を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
31	岐阜県 ぎふの木で内装木質化支援事業 10万円の助成を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
32	岐阜県 ぎふの木で家づくりローン支援制度 優遇金利による支援を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
33	愛知県 あいち認証材利用促進事業 構造材・造作材等 8,000円/m ² の助成	愛知県	お施主候補	岐阜
34	材料施工分離発注方式で適正な木材製品価格で計画的に建築材料を入手しよう	豊田市	各市町村	豊田

木づかいガイドライン 業界編C (案)

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	君も人生の方針として自然科学や農林業を選択しよう	ネバリン	中・高校生	根羽
2	君も、自分が主役になれるクリエイティブ産業・農林業の担い手になって地域を元気にしよう	ネバリン	信大・名大・岐阜女子大他	根羽
3	君も夢と希望あふれる地元の森林組合職員になって、豊かな自然の中で森づくりと木づかいを楽しもう	ネバリン	山の人	根羽
4	森づくりの達人(森の民)になるために様々な技能を身につけよう	各森組	山の人	全流域
5	森林簿と施業図を使って自分の山を覚えよう	豊田森組	森林所有者	豊田
6	自分の山づくりのプランを建ててみよう(オーダーメイドの山づくり)	ネバリン	秀美	根羽
7	様々な木材の搬出方法を見学しよう	各森組	山の人	全流域
8	山の技能作業手順書をマスターしよう	ネバリン	山の人	根羽
9	自分の山の木がいくらになるか森林施業プランを提出してもらおう	根羽・恵南	山の人	根羽・恵那
10	自然を楽しむ様々なグッズを手に入れて自然の中に飛び出そう	洲崎	女子	豊田
11	国産材の家づくりに実績のある工務店・建築士さんに会いにいこう	お施主	お施主候補	全流域
12	机やイス・家具など一生使える木製品の注文をしよう	阿部建設	ファミ	根羽
13	一生使える机やイス・家具など木製品を家族で製作してみよう	阿部建設	ファミ	根羽

14	魅力ある国産材製品のカタログを入手して木のある暮らしをはじめよう	販路開拓	ファミ	長野
15	森づくりと木づかいに取り組む、知って得して面白い魅力的な方のお話を聞きにいこう	事例集	市民	全流域
16	製材工場の端材を使って小屋づくりをしよう	ネバリン	山の人	根羽
17	住宅建築フェアを見に行こう	ネバリン	お施主候補	開催地
18	東京おもちゃ美術館を見学し児童向け木のおもちゃを研究しよう	ネバリン	保育園	東京
19	ナイス企画 需要創造型イベント・体感ツアー・木の感謝祭に参加しよう	ナイス	市民	豊田
20	ナイス企画 ナイスパワーホーム豊田プレミアムのコンセプトを学ぼう	ナイス	市民	豊田
21	木曽川流域材の家づくりのシステムを学ぼう	ナイス	市町村	豊田
22	オークビレッジ木の時間工作にチャレンジしよう	ネバリン	父と子	根羽
23	木の工作に必要な広葉樹を育成しよう	ネバリン	山の人	全流域
24	スギダラどこでもシリーズで世の中をスギダラけにしよう	ネバリン	市民	全流域

木づかいガイドライン 研究編D (案)

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	地元の大学と地域連携協定を締結して、山村・里山の課題解決に向けて学生と一緒にチャレンジしよう	信大	市町村	根羽
2	持続可能な地域づくりに向けて里山の課題を市民から集めよう	信大	市町村	根羽
3	次世代に向けた森づくりと低コスト造林を確立しよう	信大	山の人	根羽
4	スギ人工林の植物種多様性を評価し、生物多様性保全に留意した森づくりに取り組もう	信大	森林所有者	根羽
5	伐採後に発生するスギ針葉から精油を抽出して商品化に取り組もう	信大	女子	根羽
6	農林一体化事業を支援する地理情報の可視化手法を開発しよう	信大	市町村	根羽
7	山村の聞き書き調査を行い、山村文化を発掘し継承しよう	実践者	対象者	根羽
8	雪害被害林の今後の施業指針を確立しよう	信大	市町村	根羽
9	集落周辺の森林について保残木マーク施業等景観林施業を確立しよう	ネバリン	集落	根羽
10	スギ重ね梁の実用化を実現させよう	ネバリン	工務店	根羽



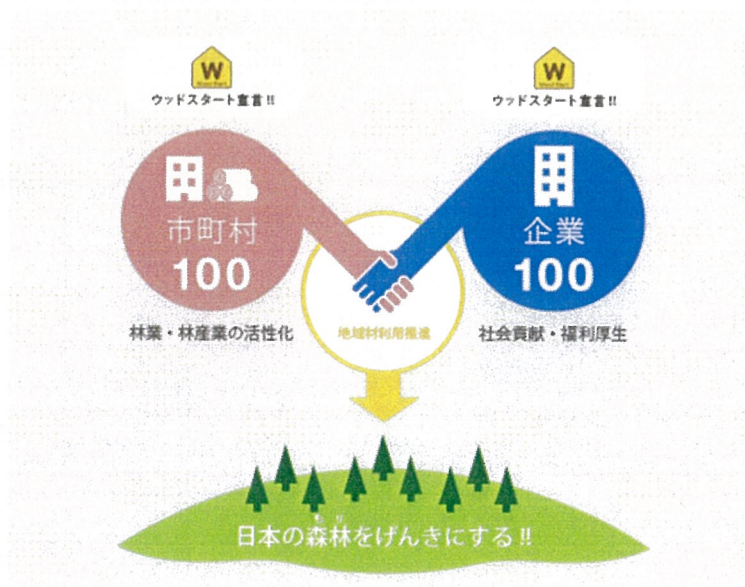
ウッドスタート宣言企業

W 「ウッドスタート宣言」

日本各地の企業が賛同！企業色を活かしたウッドスタート宣言。

私たちが目指しているのは「100の企業」と「100の自治体」を結びつけること。

環境保全による社会貢献を目指す「企業」と地域材の利活用を積極的に推進している「自治体」とが、手と手を取り合うことで、企業の社員も元気になる、林業・林産業も活性化する。そして、日本の森林を元気にする大きなエネルギーにもなるのです。

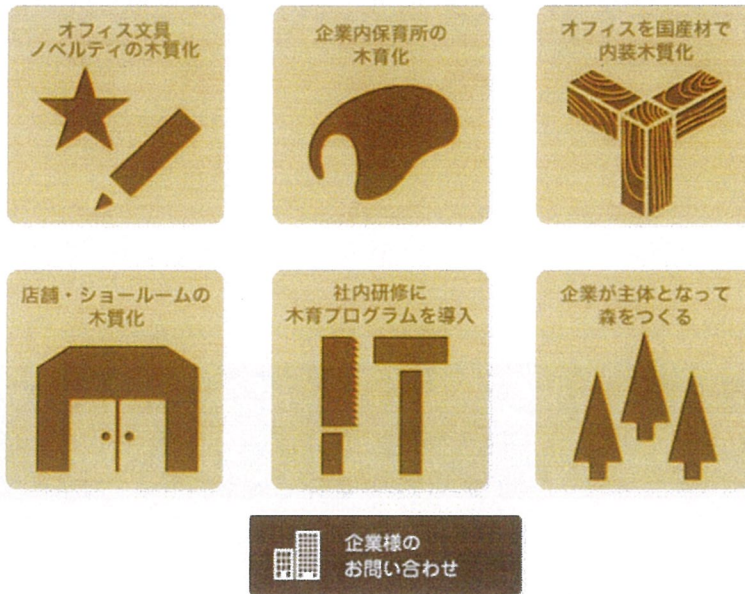


企業でスタート！木育化！

9つのプログラムのうち2つ以上を実施すると、「ウッドスタート宣言」ができます。
あなたの企業も、「ウッドスタート宣言」で、環境保全による社会貢献活動をしてみませんか？



私たちの活動をみる



以上の項目にあてはまらなくても、検討判断を行い、認定項目とします。

その他、以上の項目にあてはまらなくても、積極的な利用が認められている法人に対しては、その都度検討判断を行い、認定項目としてカウントします。木質バイオマスによる発電などもその一つです。



木育キャラバン



木育インストラクター



木育円卓会議



企業との連携



ウッドスタート宣言市町村

826

いいね!
シェア



facebookページへ



ページトップへ

イベント情報
■ イベント一覧

木育って何？

- ウッドスタート
- ウッドスタートとは
 - ウッドスタート宣言市町村
 - ウッドスタート宣言企業

- 活動紹介
- 木育キャラバン
 - 木育インストラクター
 - 木育円卓会議
 - 企業との連携

私たちについて
■ お問い合わせ

copyright 特定非営利活動法人 日本グッド・トイ委員会 All rights reserved.





ウッドスタート宣言市町村

W 「ウッドスタート宣言」

日本各地の市町村が賛同！地域色を活かしたウッドスタート宣言。

全国の自治体で、以下の6項目のうち、2項目以上を約束することによって、ウッドスタート宣言を公式発表し、調印式を行うことができます。

例えば地元の木工職人が地元の木材で作った木のおもちゃを新生児に送る「ウッドスタート」はその代表例です。その他各地の木材や文化を活かし、こうした取り組みが森を守る循環型のシステムに発展することを願いながら、全国のウッドスタート宣言市町村が、地域ならではの木育推進プログラムを展開中です。



「誕生祝い品」・・

地産地消の木のおもちゃを新生児にプレゼント

地元の木工職人が地域材で作った木のおもちゃを新生児に贈る取り組み。各地の木材や文化を活かしたオリジナル玩具づくりが着々と進んでいます。

● 詳細はこちら



「木育インストラクター」・・

地域で木育推進のリーダーとなる人の養成。

私たちは、モノ(木のおもちゃ)と場所(木育ひろば)に加えて、人(木育インストラクター)の養成にも力を入れています。この「人」が、その地域で、木と触れ合う場所を活かし、学びを提供し、木とともに生きる方法を提案していきます。

● 詳細はこちら



「子育てサロン」・・

地域材を活用した木質感あふれるサロン

私たちは、「木」を真ん中にした子育て活動を推進しています。そのシンボルとなるのが、「赤ちゃん木育ひろば」。日本の木力と魅力と、職人やアーティストの技と美学が結集した子育てサロンです。

● 詳細はこちら



「移動型おもちゃ美術館-木育キャラバン-」・・

木の良さ・楽しさを体験できる木育キャラバンの実施

移動型おもちゃ美術館「木育キャラバン」が、全国各地に素晴らしいおもちゃとの出会いの場を創ります。誰もが木のおもちゃで遊ぶことができる空間を生み出し、国内外のおもちゃ作家による木製玩具を楽しんでいただける。それが「木育キャラバン」です。

● 詳細はこちら



「木育円卓会議」・・

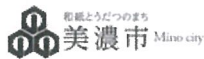
地域の木育推進をみんなで考え語り合う円卓会議

● 詳細はこちら 森林・林業・林産業に従事する人たちと、子育て支援関係者、自治体の担当者と一緒に、地域の今と未来を「木育」という切り口で議論します。



私たちの活動をみる

最新NEWのウッドスタート市町村
 塩尻市 「おもちゃ美術館」.. 東京おもちゃ美術館の姉妹館を設立
 ウッドスタートとは何かを見る
 ● 詳細はこちら 遊びと文化を大切に、地域の森林資源をふんだんに取り入れた「おもちゃ美術館」の姉妹館。これを地域の力で作り上げ、地域の魅力・遊びの充実を目指していきます。



木育キャラバン



木育インストラクター



木育円卓会議



企業との連携



ウッドスタート宣言市町村

826

いいね!
シェア



facebookページへ



ページトップへ

イベント情報
 ■ イベント一覧

木育って何?

ウッドスタートとは
 ■ ウッドスタート宣言市町村
 ■ ウッドスタート宣言企業

活動紹介
 ■ 木育キャラバン
 ■ 木育インストラクター
 ■ 木育円卓会議
 ■ 企業との連携

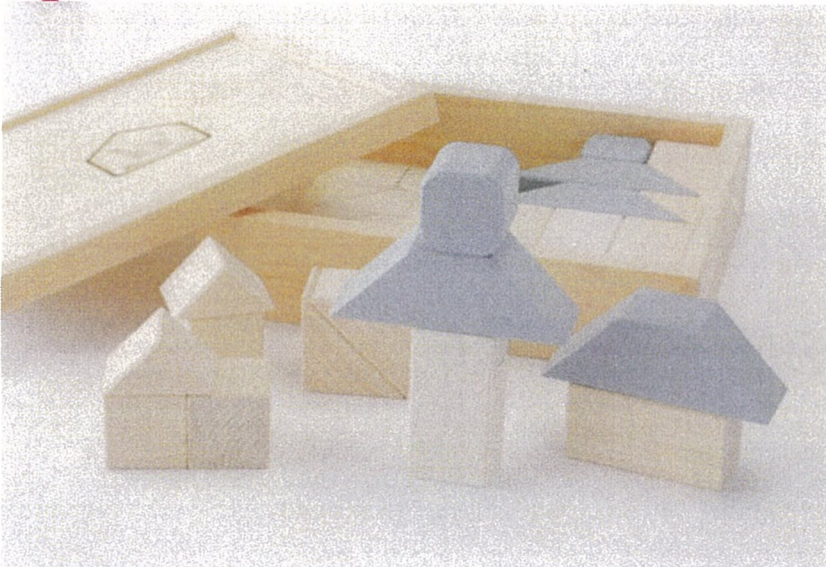
私たちについて
 ■ お問い合わせ

レポート

レポート

2014/2/17

岐阜県美濃市の誕生祝品「うだつみき」



木育先進地で生まれたウッドスタート玩具は伝統文化と地域材にこだわったご当地積み木

岐阜県美濃市は、2012年12月より東京おもちゃ美術館の支援のもと、「ウッドスタート」を開始しました。

「ウッドスタート」とは、誕生祝品として木製玩具を寄贈する取り組みです。

美濃市では、赤ちゃんにプレゼントする玩具を公募。審査のもと選ばれたのが、この「うだつみき」です。

「うだつみき」は郷土文化をふんだんに取り入れた珍しい玩具。もともと美濃市は1300年の歴史を誇る和紙作りの文化で栄えました。

また、防風・防火壁として家の屋根の両端を一段高くした「うだつ」のある町並みとしても有名です。

和紙を数多く売ったお金持ちの家ほど「うだつ」を高く立派にする風習があり、「うだつ」は、町の人々にとって成功と安全な暮らしの象徴です。

町の象徴「うだつ」を玩具に取り入れた背景には、「積み木を高く積み上げることが、子どもの成長と安全につながるように」というデザイナーの想いが込められています。

また、使われている材は美濃産ヒノキ。これは市内の8割が森林という自然豊かな環境を誇るからこそ、実現できることです。

制作も市内の職人が行っており、森から木を切り出し、製材・乾燥・おもちゃの加工まで、すべて市内で実施する、地産地消のおもちゃです。

全国では、切り出した材の活用法が少ないことが社会問題化しています。

美濃市では、地元の森林保全ボランティアグループが「市内の子どもたちのために木を使っていくことで、美濃



の自然を守っていききたい」と気持ちを込めて、材の提供に協力をしてくれています。
美濃産材の新たな活用法が生まれたことには、自治体も大きな期待を寄せています。

なお、「うだつみき」には、お片づけシートと呼ばれる美濃和紙でできた下敷きが付属されており、木箱への収納も遊びにするアイデアが取り入れられています。
ヒノキの香りも心地よく、美濃の自然と伝統文化、その両者に触れることができる素晴らしい木育おもちゃです。

[この自治体の活動を見る](#)

[← 前の記事を見る](#)

[一覧を見る](#)

[次の記事を見る →](#)

私たちの活動をみる

826

いいね!

シェア



[facebookページへ](#)



copyright 特定非営利活動法人 日本グッド・
トイ委員会 All rights reserved.



木育キャラバン
イベント情報
■ イベント一覧



木育インストラクター
木育って何？




木育円卓会議
ウッドスタート
■ ウッドスタートとは
■ ウッドスタート宣言市町村
■ ウッドスタート宣言企業



企業との連携
活動紹介
■ 木育キャラバン
■ 木育インストラクター
■ 木育円卓会議
■ 企業との連携



ウッドスタート宣言市町村
私たちについて
■ お問い合わせ

 ページトップへ

木育ラボ 赤ちゃんからはじめる 木のある暮らし



木育インストラクター

育て！木育人材！「木育人材養成プログラム」



樹や木と親しむ、“木育”の専門家への第一歩を踏み出す
「木育インストラクター養成講座」「木育指導者セミナー」を受けて、
あなたも木育の“プロ”に。

講座内容



私たちは、木のモノ・木のある暮らしの提案や創造と共に、その地域で木育を推進していくリーダー(人)の養成を行っています。

保育や子育ての中で「木育」とは、子どもが木とふれあい、木に学び、木と生きる取り組みです。

この講座では、園庭の自然物の活用や、木製品を保育や暮らしの中に取り入れる方法を学びます。また、木で創作する心地良さや面白さを体験することで、子どもたちと木に触れる楽しみ方を考えます。

暮らしの文化を木で築き上げてきた日本人、その将来を担う子どもたちには、木のぬくもりや温かさを肌で感じさせることが大

切だと考えています。木育を通して、感性豊かな心を育むことを目指します。

赤ちゃん木育サポーター養成講座

東京おもちゃ美術館1階の「赤ちゃん木育ひろば」は、親子が一緒に遊べる場所で、国産の杉材を活用した、赤ちゃんも大人もリフレッシュできる場所です。赤ちゃん木育ひろばで親子の遊びを見守り、木のおもちゃと一緒に遊ぶなどの活動をするボランティア「赤ちゃん木育サポーター」を募集します。

◆ 東京おもちゃ美術館

- ・住所: 東京都新宿区四谷4-20
- ・電話: 03-5367-9601
- ・FAX: 03-5367-9602
- ・メールアドレス: ishii@goodtoy.org
- ・団体ホームページ: <http://goodtoy.org/ttm/>

木育インストラクター養成講座

2011年から東京・大阪他で、主に全国の保育士・幼稚園教諭・子育て支援関係者、および広く一般の方々を対象に行っています。

その他の各地で行う場合は、地域の特性を活かしたフィールドワークなども盛り込んでいます。

1日・5時間半の講座です。

◆ 講座内容

- ・木育概論
- ・木育プログラムの体験
- ・木育プログラムの企画提案
- ・グループワーク、まとめ

私たちの活動をみる

 **木育指導者セミナー養成講座**

岐阜県立森林文化アカデミー(森林文化アカデミー短期技術研修)連携講座として、年に1度、2泊3日の宿泊型研修を行っています。

保育士・幼稚園教諭が対象。森林文化アカデミーの環境を活かし、木育の専門スキル身につけ、園の中で木育を先導できるスペシャリストを養成します。

◆ 講座内容

- ・木育概論
- ・木育プログラム(上級編)の体験
- ・樹木ウォッチング
- ・木育プログラムの企画提案
- ・グループワーク、まとめ



木育キャラバン



木育インストラクター



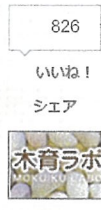
木育円卓会議



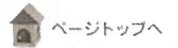
企業との連携



ウッドスタート宣言市町村



facebookページへ



ページトップへ

イベント情報
■ イベント一覧

木育って何？

- ウッドスタート
- ウッドスタートとは
 - ウッドスタート宣言市町村
 - ウッドスタート宣言企業

- 活動紹介
- 木育キャラバン
 - 木育インストラクター
 - 木育円卓会議
 - 企業との連携

私たちについて
■ お問い合わせ

木育ラボ 赤ちゃんからはじめる 木のある暮らし



レポート

レポート

2014/2/15

0歳から木に親しむ「赤ちゃん木育ひろば」



2011年10月、東京おもちゃ美術館内に木の魅力をたっぷり詰め込んだ乳幼児親子専用サロン「赤ちゃん木育ひろば」がオープンしました。この広場は、たくさんの方々の知恵と技術と愛情でできあがった場所。ここでは、企画や運営に携わった方々にお話を伺いました。

©2014 Mokuiku Labo

木育ひろばってどんなところ？

ひろばを開設するまでの思いやコンセプトを、東京おもちゃ美術館チーフディレクターの石井今日子さんに教えていただきました。

日本一の木質感あふれる 子育てサロンを目指す

森林大国の日本、匠の国でもある日本。しかし、日本の子どもたちは、国産の木製玩具で遊んでいません。私たちのNPOは、「木」を真ん中にした子育て活動を推進しています。そのシンボルとなるのが、「赤ちゃん木育ひろば」。日本各地のスギを中心とした「森のめぐみ」が、子どもに実感をプレゼントしてくれます。日本の木の力と魅力と、職人やアーティストの技と美学が集結した子育てサロンです。

アートで子育てを楽しみ感じられる場に

子どもを社会全体で見守る仕組みが失われています。パパやママが子どもとのコミュニケーションを大切と感じ、子育てにプライドを持てる情報や場所が必要です。「子育てって楽しい」と感じられるような支援をしたい。それにはグッド・トイや木のおもちゃはぴったりなツールです。



私たちの活動をみる

826

いいね!

シェア



facebookページへ

子育て支援を支える 多世代のボランティア

赤ちゃんやパパママに接するのは、保育士など子育てのプロだけでなく地域の多世代の人々もいます。事業スタートの一年前から「簡易版赤ちゃん広場」を試行していた同じ思いの十数名のおもちゃ学芸員、新しく加わった赤ちゃん木育サポーター。この方々が「赤ちゃん木育ひろば」を本当の意味で「作り」「支え」ています。また、活動に携わることで「生きがい」を感じてくださっています。美術館という、一見子育てと無縁な人が利用する場での「赤ちゃん木育ひろば」。多世代子育て支援と木育を結び付けたひとつのモデルがはじまっています。

木育ひろばの毎日・親子の遊び日記

毎日100組近い親子でにぎわう赤ちゃん木育ひろば。ここでしか味わえない「木」の世界では、赤ちゃん親子によって毎日ドラマが繰り広げられています。石井さんの日記から日々の様子をご紹介します。

episode1 夢中で遊ぶ赤ちゃんは健康的

広場を見渡していると、スギコダマのトンネルで親子が「いないいないばあっ」とかくれんぼをしたり、滑り台を抱っこしてもらい何度も繰り返し滑ったり……。引き車を押し引きする姿や、ハイハイする姿もよく見かけます。スギコダマの池では、両手にコダマを持って遊び、池の坂を上ったり下ったり。どの子も遊びに夢中で、退屈してぐずる子やうろうろ動き回る子がほとんどいません。「ここに来ると、目の色が変わって遊び始めます」と言う方も。集中してよく遊ぶので1時間くらいで疲れて眠くなってしまいう子も少なくありません。「たっぷり遊んだから、ご飯を食べてお昼寝しようね」と、帰り支度を自然に始める姿がとても健康的です。

episode2 パパとママにも変化が

30mmのスギ材の床は暖かくて「床暖房がはいっているの?」とよく聞かれます。思い思いの床に座っているお客様を見ていると、ママたちが無駄に歩き回らずどっしり座って赤ちゃんと同じ向き合って遊んでいるのがわかります。携帯メールに夢中になる人もほとんどいません。むしろ、パパとママの方が楽しそう……。

episode3 スギの魅力を感じて

杉の材は、固くて荒々しくざらざらすることもあり、すべすべで暖かく柔らかい時もあり、温かく瑞々しいかと思えば、乾いてひびが入る……。と、さまざまな表情を見せてくれます。温度や湿度によって強く香り立つ日もあれば、無機質に感じる日もあり、不思議な魅力でいっぱいです。赤ちゃんが時々、手や顔を木肌にくっつけて気持ち良さそうにうっとりしていることがあります。それを見ているパパやママの顔もおだやかでとても素敵です。



ページトップへ

イベント情報
■ イベント一覧

木育って何？

copyright 非
定 非 営 利 活
動 法 人 日 赤
グッド・トイ委
員会 All
rights
reserved.

ウッドスタート

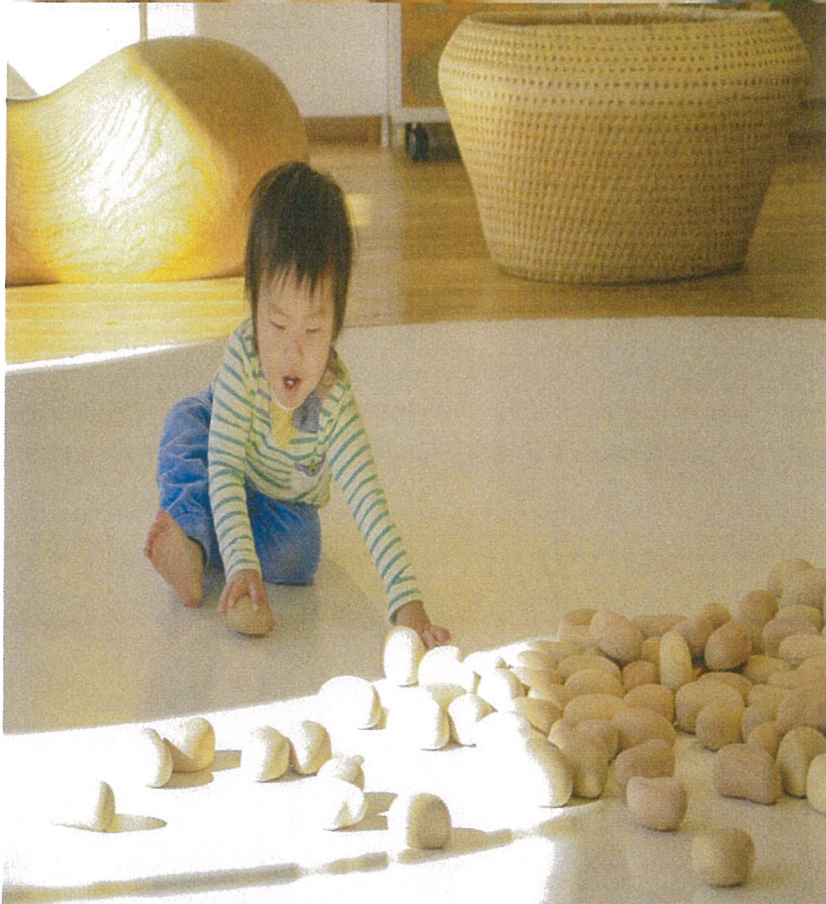
- ウッドスタートとは
- ウッドスタート宣言市町村
- ウッドスタート宣言企業

活動紹介

- 木育キャラバン
- 木育インストラクター
- 木育円卓会議
- 企業との連携

私たちについて

- お問い合わせ



ひろばにやってきた「杉」って

杉は日本で最も多く植林されている木。東北から九州まで幅広く分布し、古来より建築材などにも多用されている身近な存在です。成長が早く、まっすぐにスクスク育つ針葉樹で、戦後の荒れ果てた山を何とか再生しようと、この成長の早い杉が好んで植えられました。肌触りがあたたかく、特有の香りが心地よいのが特徴の「杉」

f

は、木育ひろばにたくさん利用されています。その一部、ハイハイにぴったりの床と、座り心地の良いベンチについてご紹介しましょう。

フローリングは東京多摩産

コンクリートの約2倍ともいわれる杉の断熱性。周囲の温度に影響されにくいので、夏は涼しく、冬は温かい環境を生みます。一般的な床板の厚さは12~15mm程度といわれる中、ひろばの床板はなんと30mm。「床暖房を入れているんですか?」と聞かれるほどあたたかです。空気をたくさん含んでいるため、やわらかくて転んでもヘツチャラ!

ベンチは宮崎県の飴肥杉

粘りが強く折れにくいのが小国杉の最大の特徴です。九州の激しい台風にも負けず、幹折れの被害が他の品種に比べて少ないことで有名。杉本来の淡いピンク色で、置いてあるだけでも美しく、腰掛けるとやわらかくあたたかいベンチです。

[一覧を見る](#)

[次の記事を見る](#)



木育キャラバン



木育インストラクター



木育円卓会議



企業との連携



ウッドスタート宣言市町村

木育ラボ 赤ちゃんからはじめる
木のある暮らし

f

木育キャラバン



「遊び文化のルネッサンス」を
すべての子どもとおとなに

Nextgeneration... 

- 木のおもちゃ、大きな遊び心 -
- 子どもとおとなに、心の栄養をお届けします -

「今こそ、自由自在に遊ぶチカラを、ふたたび人の手に」



そんな思いを抱く人の住まう地域こそが木育キャラバンの行く先です。

赤と緑のキャラバンボックスに、木のおもちゃと遊びをギッシリ詰め込んで、日本全国津々浦々…あなたの町に、村に、おもちゃ

美術館がやってきます。



私たちの活動をみる

826

いいね!

シェア



facebookページへ

1.木のおもちゃが大集合！触れて遊んで「木育体感」



ここには日本全国世界各地から集めた、きわめて質の高い木製おもちゃが勢揃い。一度にこれほど多くの種類に出会える機会は他にありません。

じかに触れて遊んで、木のおもちゃの温もりと楽しさを心行くまで感じてください。

★木育キャラバンは「木育体感」の手づくりアミューズメントパークです。

2.見る、聴く、参加する！遊びのライブステージ



コンサート・大道芸・紙芝居・手品などから、例えばダンボールの秘密基地づくり・手作りおもちゃコンテスト・なりきり変身あそび・音あそびおもちゃづくりなど、見て聴いて歌って踊って、みんなで遊べばもっと楽しい遊びのライブステージ。

★遊びの達人からおもちゃコンサルタントまで、開催地域のみなさんが主人公です。

3.いつもの会場が木育キャラバンの世界に



キャラバンボックス、会議用長机を覆う帆布製カバー、2つ折りのパーテーションボードなどは、シンボルカラーの赤と黄色、そして森をイメージした緑と白木でデザインされたクオリティの高い専用品です。このセットをスピーディにセットアップすることができます。

★いつもの会場を、美しさ楽しさ満点の木育キャラバンに変身させます。

4.設営から撤収まで「まるごと楽しもう」が合言葉

「キャラバンボックスを開いて、おもちゃを取り出すところから、ワクワクする」・・・おもちゃ好き、遊び好きなら設営作業から熱中できるのが木育キャラバンです。さらに開催中の運営、撤収までをまるごと楽しめるよう、館長が親身になってサポートします。

★「やってよかった！」と開催地の方が心からそう感じるイベントを目指しています。

開催当日迄の流れ

1. お問い合わせ
2. 書類記入



開催要望にあたっての、あなたの思いやイメージ、規模やご予算等をお聞かせください。

3. TTM館長/GTCディレクター協議

あなたの思いを受けとめて、最適な開催内容を検討・ご提案させていただきます。

4. 審査通過

ご担当とGTCディレクターの打ち合わせ開始

5. 開催要項の検討・決定

会場の選定から活用方法、PR活動、市民スタッフの募集、遊びのライブステージ参加者選定などを検討、決定

6. キャラバンボックス到着

選定されたおもちゃと、会場設営ツールが届きます

7. 館長、開催地入り、設営作業スタート

開催前日、GTC館長が開催地入り。主催者・市民スタッフと力を合わせて楽しく会場を設営します。

8. 開催当日！

木育キャラバン 5つのキーワード

- 1 = 「遊び文化のルネッサンス」をすべての子どもにおとなに。
- 2 = シンプルな遊びから、大きな想像力が育まれます。
- 3 = 木のおもちゃと遊びを通じて、日本全国で木育の普及に貢献します。
- 4 = 開催地域の人と文化との出会いを想像します。
- 5 = 全国のトイ・コンサルタントの活動を協力を支援します。

「移動おもちゃ美術館」スタート宣言！

全国各地を回る「グッド・トイ・キャラバン」。
おもちゃの力で、遊びルネッサンスを地域で創りあげたい—そのような思いが真っ赤な桐の木箱に込められています。
さあ！みなさん！キャラバン隊の出発です。



NPO日本グッド・トイ委員会理事長
東京おもちゃ美術館 館長 多田千尋

熱意と遊びゴコロで一緒にしましょう

グッド・トイ・キャラバンを創るのは、セットが5割、あとの5割は開催地域のみなさんの熱意と遊びゴコロです。
風通しがよくなり地域が元気になる。そのきっかけを一緒に創れば、これほどうれしいことはありません。



グッド・トイ・キャラバン
チーフディレクター 曾我部

木育キャラバン Q&A

- Q.開催に適しているのはどんな場所ですか？小学校の体育館でも開催できますか？
- A.市民センターや会館などのホール(机やイスが撤去できることが条件)、視聴覚室、会議室なども適しています。折りたたみ式の長机、パイプ椅子などを活用します。もちろん小学校の体育館でも可能。デパート、指定文化財の建築物、見本市会場での開催実績もあります。
- Q.主催者側は、どんなお手伝いや動きをすればいいのでしょうか？
- A.開催前日の会場設営、開催当日の運営、そして開催終了後の撤収まで一緒に行きます。木育キャラバンは、設営や撤収が楽しく行えるように工夫されています。また開催当日は、市民スタッフ一人ひとりがボランティア学芸委員として来場者をサポートできるように、GTC館長がレクチャーを行います。

ページトップへ

イベント情報
■ イベント一覧

木育って何？

copyright 非
定非営利活
動法人 日オ
グッド・トイ委
員会 All
rights
reserved.

ウッドスタート
■ ウッドスタートとは
■ ウッドスタート宣言市町村
■ ウッドスタート宣言企業

活動紹介
■ 木育キャラバン
■ 木育インストラクター
■ 木育円卓会議
■ 企業との連携

私たちについて
■ お問い合わせ

東京おもちゃ美術館



キャラバン隊はいつも、ここから、やってきます。

東京都心・四谷。閉校した築80年の小学校を利用した「東京おもちゃ美術館」はおもちゃと遊び文化が大集合！すてきなグッド・トイに触れて、遊ぶことができるうえに、手づくりおもちゃ教室や、企画展、コンサートなどでいつも親子連れを中心に大にぎわい。

もちろんここは木育キャラバンの基地でもあります。キャラバンボックスのおもちゃたちに磨きながら、次にいくはどこだろう？

と、隊員たちは楽しい計画を練っています。お近くにいらしたときは、ぜひ

お立ち寄りくださいね。



資料請求



お問い合わせ



木育キャラバン隊長ブログ



木育キャラバン



木育インストラクター



木育円卓会議



企業との連携



ウッドスタート宣言市町村

レポート

レポート

2014/2/16

沖縄の大自然の中に「森のおもちゃ美術館」をみんなで作る



■ 沖縄の大自然のなかにやんばる森のおもちゃ美術館を設立！

寄稿者 東京おもちゃ美術館館長 多田

国頭村に「やんばる森のおもちゃ美術館」ができる。当時のだれもが本気にしない「夢」のような話の実現しました。舞台となる「やんばるの森」は、5,000種の動植物が生息する自然の宝庫です。天然記念物にも指定されている「飛べない鳥」ヤンバルクイナをはじめ、世界でもこの森にしかいない動物や植物も数多く存在していま

す。この森の中にある公共施設をリニューアル、「やんばる森のおもちゃ美術館」がついに設立されました。



私たちの活動をみる

826

いいね!

シェア



facebookページへ



東京おもちゃ美術館は、美術教育の専門家であった私の父、多田信作が30年前に創設しました。世界各国の美しい玩具を手に取り遊べ、手作りおもちゃで創意工夫の楽しさを味わえる美術館として東京の中野の地元で

愛されていました。5年前、新宿区四谷へと移転しました。

現在は、年間120,000名に来館頂いており、200名のボランティアと1,000名の寄付者が支える、全国でも珍しいNPOが自主運営する「市民」立のミュージアムとして徐々に認知されつつあります。



(東京おもちゃ美術館「木育ひろば」の木製遊具も大人気)

沖縄とおもちゃには琉球の時代から関係があり、とても根深いものなのです。

その「東京おもちゃ美術館」初の姉妹館となる「やんばる森のおもちゃ美術館」の創設は、ここ25年間で70回以上、沖縄に足を運んできた私の心を大きく捉えた「ファーカンダ」と「ユッカヌヒー」という言葉が、その原動力になりました。

「ファーカンダ」とは、祖父母と孫を言い表す方言ですが、ファーは葉っぱを、カンダは蕨を意味します。祖父母と孫の関係を「葉っぱと蕨は切っても切れない関係」になぞっているのです。

また、「ユッカヌヒー」は、琉球時代より続いていた旧暦5月4日に開催されるおもちゃの専門市。唯一この日だけはおもちゃを買ってもらえた日で、眠れなくなるほど、沖縄の子どもにとっては楽しみなお祭りでした。しかし、今となっては、残念ながらファーカンダもユッカヌヒーも知る人は、ほとんどいません。

私は、沖縄にこそ残る子どもとお年寄りの魅力ある関係性や文化的重要性に魅了され、わずかな離島を除いては全市町村を訪れ、ファーカンダとユッカヌヒーを追い求めていたのです。

ページトップへ

イベント情報
■ イベント一覧

木育って何？

copyright 特定非営利活動法人 日オグッド・トイ委員会 All rights reserved.

ウッドスタート

- ウッドスタートとは
- ウッドスタート宣言市町村
- ウッドスタート宣言企業

活動紹介

- 木育キャラバン
- 木育インストラクター
- 木育円卓会議
- 企業との連携

私たちについて

- お問い合わせ



そんな中、国頭村と森林組合の職員との運命的な出会いがありました。本島の最北端、国頭村は森林と共に生きてきた地域です。古から琉球王府を支えてきた貴重な森林で、大交易時代の船舶や首里城の建て替えに至るまで、やんばるの森の樹木は琉球王朝の期待に応えてきたのです。

琉球王朝時代より森を守り続けてきた国頭村、持続可能な林業を目指す林業関係者にとって、全国で木育推進活動を進める私とは、一気に打ち溶け合えました。遠方地にも関わらず、村内の職人さん、林業に携わる人、村役場の職員の方々と一緒に何度も東京おもちゃ美術館にいらっやいました。村の子どもたちと直接向かい合う保育者の方々も「やんばる森のおもちゃ美術館」を切望していました。国頭らしい森の恵みのおもちゃたちで、子どもの成長と発達を育むことを強く願っていたのです。



(子どもたちの教育のこと、やんばるの森との共生のこと、
国頭村の将来のことを熱く語り合いました。)

子どもから大人までが森林と仲良く付き合っていくビジョンを示せるのは「木育」しかない、同じ理念を共有していききました。こうした熱い思いを分かりやすく示せるのは、多世代で楽しめる「おもちゃ」や「遊び」であろうと考え合いました。この「木育」と、世代間交流の象徴である「ファーカンダ」、それに、おもちゃの専門市である「ユッカヌヒー」が大きな結晶となり、「森のおもちゃ美術館」の構想へと一気に膨れ上がっていったのです。

遊具は、県のシンボルツリー「蔡温松」で作られます。

館の象徴となるのが樹齢300年の「蔡温松」で作られる遊具です。昨年の大型台風の到来により一部が倒木。今回は、その材を使い、トンネルやすべり台などを造形作家が制作しました。



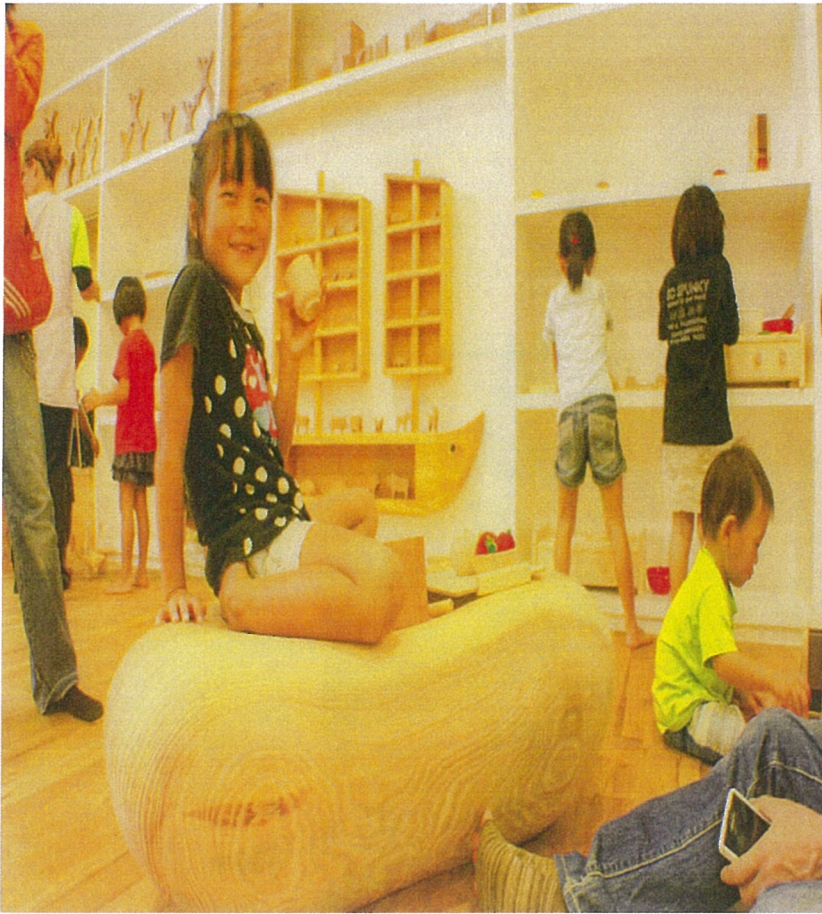
(名前は、琉球王国の河川工事や山林保護に尽心し、
農業の発展に貢献した政治家「蔡温」に由来しています。)



木質感溢れるおもちゃは、その心地よさは子どもたちに温もりの栄養を与えます。また、埼玉大学の調査によると木目は子どもたちの集中力も生み出すことも分かりました。琉球松は、木目の美しさでも定評があり、多くの子どもたちの目に触れさせてあげたい天然デザインです。ここに並ぶ100点以上のアナログの木の玩具は、百貨店や量販店の玩具にはない、素朴さがあります。対象年齢0～99歳とする館内は、子どもたちを癒し、世代間の会話が豊かな、賑やかなミュージアムになりました。



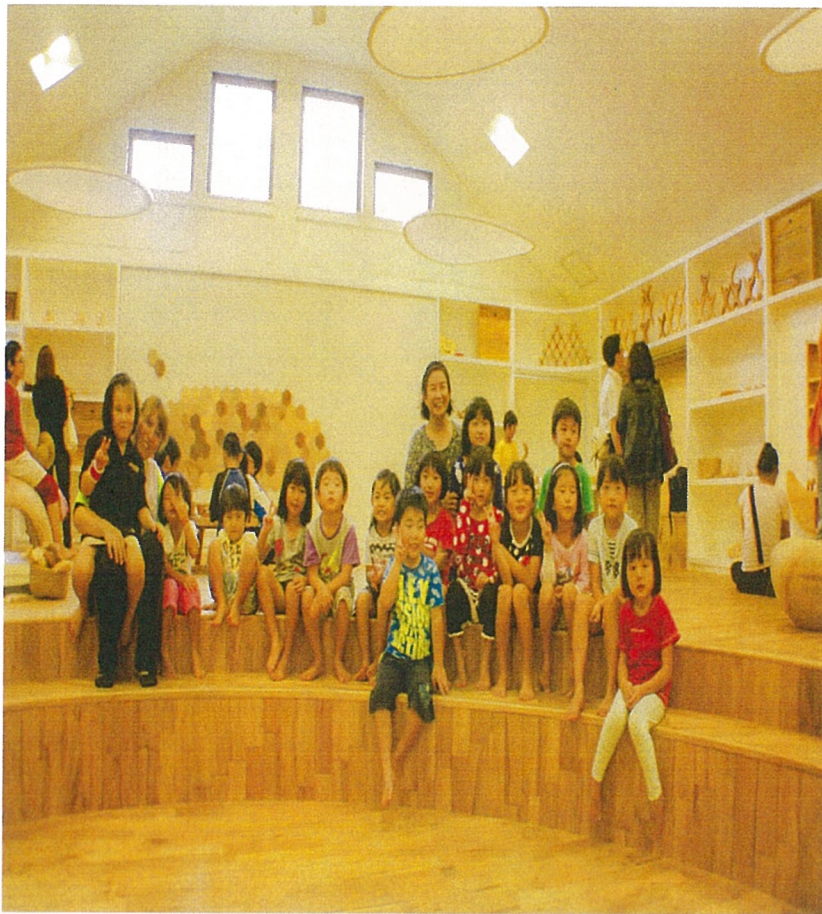
地域の職人が、地元の材を使い、地元の子どものために作る木のぬくもりあふれる場は、全国でも珍しい地産地消型の憩いの場です。村内だけでなく、県内外からも貴重になるのではないかと、観光資源としても注目されています。



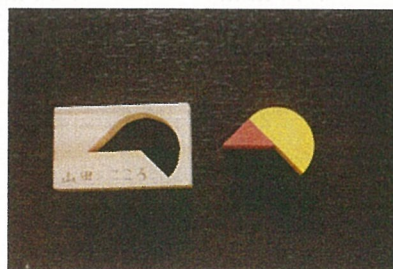
美術館のおもちゃは皆様の「寄付」からおもちゃ美術館の命とも言える遊具。その遊具の資金、製作費を、クラウドファンディングサービスReadyfor〜?を通して集めることに成功しました。

なんと全国の支援者から7,862,000というReady for〜? 最高額での寄付達成となりました。本当に皆さんには感謝もしきれません。

寄付の引換券となるヤンバルクイナのつみきには、お子様のお名前を入れることもできます。プレゼントにも使えます。



皆様には是非一度ご来場いただきたいと思っています。



寄付を通して「一口館長」となって頂いた方には、ヤンバルクイナの形をした「つみき」をお送りします。この2つの「つみき」は、実は合体できるようになっています。
「森のおもちゃ美術館」にご来場いただいた際には、来館の証として、ヤンバルクイナのピースをご自身のつみきの中央に収めることができます。
また、東京おもちゃ美術館監修の玩具「琉球松のつみき」は子どもの手にしっかりと収まるつみきとして、現地の職人が制作します。
今後、村の子どもたちへの誕生祝い品としてデビュー予定です。
子どもと大人が遊びを通して、地元の自然に興味を持てる場、それが「やんばる森のおもちゃ美術館」の設立・運営で達成できると信じております。

皆様是非一度足を運んでいただければと思います。

[この自治体の活動を見る](#)

[前の記事を見る](#)

[一覧を見る](#)

[次の記事を見る](#)



木育キャラバン



木育インストラクター



木育円卓会議



企業との連携



ウッドスタート宣言市町村

私たちについて

私たちは、木のおもちゃから暮らしの中まで木の持つ特質を活かして、子どもたちの豊かな心の発達や大人に癒やしの効果をもたらすことを提案しています。また、森林や木に関心を持ち、循環型社会の構築や日本の木の文化を伝えていくため、自ら考え行動するきっかけを創出しています。

スタッフ紹介



多田 千尋
CHIHIRO TADA

◆役職:
認定NPO日本グッド・トイ委員会代表理事
東京おもちゃ美術館 館長

メッセージ ▶ 「ウッドスタート」で暮らしに木育！

赤ちゃんが初めて出会う「ファーストトイ」は地産地消の木のおもちゃを！
赤ちゃんが気持ちよくハイハイができる内装木質化の子育てサロンを！
このメッセージは、今、精力的に推進している「ウッドスタート」運動の市町村に向けたメッセージです。すでに、新宿区（東京）、美濃市（岐阜）、国頭村（沖縄）など全国7市町村と約束があったウッドスタート運動は、暮らしの真ん中に木を取り入れていくことを推進しています。



馬場 清
KIYOSHI BABA

◆役職:
日本グッド・トイ委員会 事務局長
◆プロフィール:
大学教員を辞して、NPOのスタッフになって最初の仕事が林野庁の「木育」の補助事業の申請書を書くことでした。恥ずかしながらそのときには正直この「木育」がこれほどまでに大きな事業になるとは想像すらしていませんでした。あれから4年。今では、「食育」に勝るとも劣らないほど、大きなうねりになる可能性すら感じています。それはやはり木の持っているさまざまな「力」に惹きつけられる人が多いのだと思います。

大きさに言えば、これまでの現代人のライフスタイルを大きく変える何か……。それが木にはある。私もそう感じています。今年の年末には、「木育」が流行語大賞になることを祈って、さらに全国に発信し続けていきたいと思っています。



遠藤 智史
SATOSHI ENDO

◆役職:
日本グッド・トイ委員会 ウッドスタート事業部

◆プロフィール:
日本人が日本の木を使うということは、国産材の利用促進と合わせて日本の文化を継承していくことにつながると考えています。森林資源大国であり、木の伝統文化や匠の技術が溢れている日本において、暮らしの中へもっとナチュラルに木が使われていくことを期待して、ウッドスタート100×100のプロジェクト

に励んでいます！
木育はつながりのキーワードというコンセプトのもと、このプロジェクトで日本中の子どもをはじめとする全ての人たちが「森や木」との関わりを主体的に考えられ、豊かな心を育てていくことを目指します。

全国の木育アドバイザーを紹介

※敬称略・順不同



浅田 茂裕
SIGEHIRO ASADA

◆プロフィール:
埼玉大学教授。木によるものづくり教育、木質環境の快適性を専門領域とし、学校校舎や公的施設の木質化の効果について研究を進める。木育推進委員、木育アドバイザーボードメンバー。



田口 浩継
HIROTSUGU TAGUCHI

◆プロフィール:
熊本大学教授・日本産業技術教育学会理事。博士(公共政策学)。技術・家庭学習指導要領作成協力者(文科省)。年間1万人にもものづくりの場を提供、5年間に900名の木育推進員を養成。



松井 勅尚
TOKINARI MATSUI

◆プロフィール:
岐阜県立森林文化アカデミー教授。彫刻家。日本人が木と生きる暮らしを取り戻すことを目指し、文化と子どもを真ん中においた地域づくりを木育で模索中。「幼児の心とからだを育むはじめての木育」(黎明書房)編著。

山下 晃功
AKINORI YAMASHITA

◆プロフィール:
島根大学名誉教授・特任教授。日本の木育の第一人者です。生涯木育として、幼児から高齢者まで広範囲に

私たちの活動をみる

826

いいね!
シェア



facebookページへ



木育アクティビティを開発、実践しています。これらの講座は軽妙なトークと楽しく、わかりやすい指導で全国的に有名です。

copyright 特定非営利活動法人 日本グッドトイ委員会 All rights reserved.



竹本 吉輝
YOSHITERU TAKEMOTO

◆プロフィール:

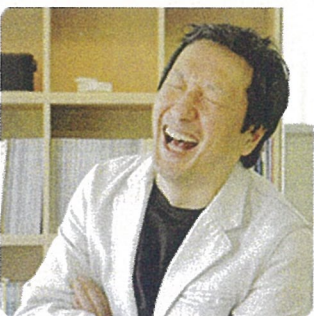
トビムシ代表、2013年東京森と市庭を設立、代表取締役役に就任。専門は環境法。国内環境政策立案に多数関与。同時に、財務会計・金融の知見を加味した環境ビジネスの実際の、多面的展開にも実績多数。子供だけでなく大人たちも童心を取り戻しながら木に触れられるイベントを主催する。



水谷 伸吉
NOBUYOSHI MIZUTANI

◆プロフィール:

メーカー勤務、インドネシアでの植林団体を経て2007年よりmore trees事務局長。森づくりを推進しつつ、国産材の利用促進、カーボンオフセット、グリーンツーリズム、地域コミュニティの活性化なども手掛ける。



若杉 浩一
KOICHI WAKASUGI

◆プロフィール:

パワープレイス株式会社シニアディレクター・日本全国スギダラケ倶楽部 本部デザイン部長。

木や森が私たちの暮らしから遠ざかってしまったのはいつ頃からでしょうか。そこで川上(森)と川下(暮らし)をつなげていくことが木育の大きな課題のひとつとなっています。そしてそこに「ビジネス」が生まれるチャンスがあります。企業やNPOが取り組む木育活動を取り上げ、ビジネスとしての可能性について考

えています。



木育キャラバン
イベント情報
■ イベント一覧



木育インストラクター
木育って何？



木育円卓会議
ウッズスタート
■ ウッズスタートとは
■ ウッズスタート宣言市町村
■ ウッズスタート宣言企業



企業との連携

活動紹介
■ 木育キャラバン
■ 木育インストラクター
■ 木育円卓会議
■ 企業との連携



ウッズスタート宣言市町村

私たちについて
■ お問い合わせ

ページトップへ



矢作川流域で進めたいスギダラ木づかい推進活動と

ウッドスタートの明るく楽しい未来への展望

スギダラ矢作川流域支部長

根羽村森林組合 参事 今村 豊

1 「木づかい」推進の目的と「森の民」としての努め

私は矢作川流域圏懇談会の山部会に参加しており、その部会で「木づかいガイドライン」作成の担当になっています。矢作川流域を巡る様々な課題の内、水資源の安定供給を図るには、これからも上流域の森林整備を積極的に進め、水源かん養機能を持続的に発揮させていく必要があります、そのためには、山村で暮らす森林整備や木材加工の担い手が、林産業によって経済的に自立し、安心して暮らせなければなりません。「木づかいガイドライン」には、こうした「木づかい」による森林整備と木材加工の推進により、人の暮らせる山村社会を作り出していく意義があります。

上流域にある森林資源を整備し、それを下流域等で活用していくことを「木づかい」と呼び、森林を整備し活用していく上流域の「林産業」＝「木づかい産業」の振興により、魅力ある森林と木材加工の職場を地域に確立し、安心して林産業で自立できる山村社会に導いていくことが「木づかい」推進の大きな目的です。



根羽村のスギ人工林



根羽スギの家にして良かった

山村に住む私達「森の民」の存在意義は、多くの先人達によって育成され充実した森林資源を、持続的・計画的に整備し、それらをきちんと活用して自分達の生活の糧とし、また、その森林や木の恩恵を下流域の方々にしっかりと伝え贈ることです。森林の整備を依頼された村民から「見栄えのある山になった、ありがとう」と言われることを最大の喜びとし、伐り出した木材はきちんと製材加工して、皆さんに「すごい木だなあ、やっぱり木の家にして良かったなあ、木のぬくもりに囲まれて幸せだなあ」と言ってもらえることが、森や木に携わる「森の民」の誇りです。

植えられた木は植林されて長い間、水源かん養林として水資源の安定供給という公益的機能を果たしていますが、伐り出されて使われるようになってやっと始めて、

森林所有者や木を使われる方の役に立つことができます。恐らく木の嫌いな日本人はいないでしょう。木の自然な温もりは人の心を和らげます。「木の文化」のある日本なので、育てた木をきちんと使う、そんな普通の木の活用や使いみちを「森の民」は願い、下流域の方々にもっと身近な生活空間で木を使ってもらい、皆で木を使うことで人の集まる居心地の良い地域の公共的な空間も作っていただき、もっと木の魅力に気付いて欲しいと願っています。皆さん、木は大好きでしょ！

しかし、現在の日本においては「林業」という言葉は死語になりつつあり、教科書からは「林業」という言葉が消えています。林業の最前線で働く技能職員の姿は、一般社会からは見ることがないし、どんな風にして木を伐り出しているか、どんな苦勞をしているのかは全く想像できないと思います。そんな状況ですが、この「林業」という産業を支えているのは、全国から集まった森林や木の仕事をしたい、という志を持った若者です。その多くの方は、森林や林業の専門的な勉強をしてきた



志のある山の技能職員

訳ではありません。ではなぜ、彼らはやって来たのか。それは、自然の中で働きたい、自分の力や技能を活かしたい、都会や人間関係は煩わしい、歯車のひとつという感じから抜け出したい、森林や木が好きだ、小さい頃に森林を歩いた、アウトドアが好きだった、山登りに夢中だった、一資本家の奴隷でなく社会的使命感のある仕事に就きたかった等、様々ですが、やはり基本的には「自然の中で仕事がしたい」、「自分が主役になって成長したい」、「今自分が存在し働くことに対する実感を得たい、生きることへの真摯さが大切だ」という面から、林業が自分には最も相応しい、という思いがあってこの職業を選択されています。今は、実戦力と志のある「森の民」として活躍されていますが、ある意味、林業は「志産業」と言えます。

自分が伐採・搬出した森林の将来が楽しみ、と多くの職員は口にします。そんな頼もしい彼らと話し合っていると、私達は彼らにとって夢のある職場にしなければならないと痛感します。そのためにもっと私達が社会に働きかけて、山村が生き残れて、経済的に安心して林業に取り組めるような社会的なシステムを構築しなければならないと思います。そうしないと、今働く技能職員のモチベーションの持続や、社会的に引き継がれていかなければならない将来的な林業の人材を確保することが困難であるし、夢や希望を持って山村や林業に就職する者が、本当に志のある限られた方に特化されてしまうと思います。現状は、こうした志ある



自分で伐採した山の将来が楽しみ

若者に支えられた産業と言っても過言ではないでしょう。「木づかい」推進は私達が今取り組める自助努力のひとつです。木を贈り届ける立場から、自らの存在意義も問いかけながら、木の持つ魅力、森林や木と過ごす豊かな時間を下流域や流域の方々に伝え、もっと身近な生活空間を流域の木で満たして欲しいと思います。



「木づかい」を推進する「木づかいガイドライン」は、例えば、このような森林組合の最前線の技能職員等が山村社会で安心して暮らせることや、青少年がこれから森林や木を対象とする職業に就けるように導く方法にも配慮しながら、現状を打開するためにはどんなトライが必要なのか、検討・提案しています。こうした検討・提案の中で、

森林や木の活用、山村における農林業による持続可能な地域づくり、里山の活動グループ同士の新たな「木づかい」をきっかけとした連携、山村の様々な元気を生み出す新たな潮流づくりにも結びつけたいと考えています。「木づかい」が流域内の社会に広く浸透することで、山村の林産業の振興が図られて、上流域の山村等の雇用の場が確保されます。その結果、若者のＩターン受け入れ等による定住促進が進み、新たな「森の民」が誕生して過疎化が止まり、持続可能な地域づくりに結びつくような成果を期待しています。

また、山村では林業を支える若者の存在が常に身近にあるため、彼らの想いを知る機会が多く、物理的に厳しい職場環境、決して高くない給与、チームの和が必要とされる人間関係等から、彼らの本音や今後の将来設計について考えずにはいられません。組合経営的にも、森林整備部門と製材加工部門の戦略や、利益の向上に向けた取り組みが常に頭から離れません。

従って、私にとって「木づかい」とは、山村社会の存続に関わる必然的に取り組まなくてはならない課題であり、「森の民」として生き残るためには誰と、どんな「木づかい」の行動を、誰に対して展開していくのか明確にしなければならない、というモチベーションがあります。



森林組合の製材工場は山村の貴重な雇用の場

2 矢作川流域圏懇談会山部会における「木づかいガイドライン」とは

「木づかいガイドライン」は、矢作川上流域にある森林資源を下流域の流域住民に活用してもらおう上下流連携により、流域内の森林整備を推進させ、同時に地域の林



さあ皆で樹木の配置を考えてみよう

産業等の地域産業の振興を図ることにより、活力ある流域社会を構築しようとするものです。同時に、流域の方々に森林や木の魅力を伝え、「木づかい」推進活動に私達と共に参加していただくように呼び掛けるものです。一緒に行動して検討したり、体験してもらう多くの場面を提供して、森林や木と過ごす時間の楽しさを感じていただければと思っています。

その内容は市民、行政、業界、研究機関が一体となって、現在実践されている「木づかい活動」も含め、これからどのような行動を展開していくことが、この流域の「木づかい」推進に結びつくのか、流域内には現在どのような取り組みが行われているのかを把握しながら、その一つひとつの取り組みを、その実践者から伝えたい相手を意識して、市民の目線から提示しようとするものです。山部会以外の2つのテーマである「山村担い手事例集づくり」、「森づくりガイドライン」の検討と併せて、毎回メンバー同士で、どのような「木づかいガイドライン」を作成するか検討しており、現在その原案が固まりつつあります。



信州大学による次世代に向けた低コスト造林地調査

「木づかいガイドライン」の意図していることは次のとおりです

- ① 市民、行政、業界、研究機関の各関係者と有志が流域内の「木づかい推進」に一体感・共感・共通認識を持って取り組むこと
- ② 現在流域内の各地で行われている様々な立場の方の魅力的で楽しい「木づかい」の取り組みを「見える化」すること
- ③ 「見える化」された木づかい推進活動の有志の方々と「人の輪」をつくること
- ④ その「人の輪」による様々な化学反応により、流域内の各地で市民に「木づかい」に対する魅力や楽しみを伝え、共感と活動を呼び起こすこと
- ⑤ 木づかい提案者ひとり一人の培ってきた森や木に対する経験値を重視し、提案者とその受け手がチームとなって、木づかいの主役と立役者のコンビで木の魅力を発信していくこと
- ⑥ 「木づかいガイドライン」を手にとると、すぐに行動したくなるような「さあ～しよう」という市民目線に沿った提案とすること

3 「木づかいガイドライン」と矢作川流域で進めたいスギダラ木づかい推進活動

「木づかいガイドライン」は、市民、行政、業界、研究機関のそれぞれの立場の方々が、現在行っている「木づかい活動」を、今後対象者として働きかけたい相手を想定しながら「さあ～しよう」と言う形で、提案するものです。



インパクトがあって盛り上がった若杉さんの講演

今回、この提案の原案検討中に「全国スギダラケ倶楽部」の若杉会長をお招きしてご講演をお願いし、その活動内容を参考にさせていただきました。感想を一言で言えば、すごい一言です。様々な立場の方々が、様々な公共施設等をスギダラケにする活動を全国各地で展開されていて、その仕掛人が若杉さん、とい

うことですごいエネルギーだなあーと驚きました。また、全国各地でどんどんスギダラケの活動が人々に伝播していく様子や、それも優れたデザイン提案をされる実力ある内容で、その上、何だか皆で踊りまで作って盛り上がっている、うーんすごすぎる。感服しました。それに話が面白過ぎる。振り返って、私達の活動は（まだ始まっていないけど）固いのかなあー。

いずれにしても、若杉さんが平成26年9月19日に根羽村に来ていただいたのをきっかけに、メンバーの丹羽さんの上手な取り計らいで「スギダラ矢作川流域支部」がめでたく発足いたしました。一応、今までの成り行きと村長の許可を得て、私今村が支部長を務めさせていただくことになりました。よろしくお願ひします。まだ、皆様に確認しておりませんが、支部活動の方向性と目的（案）は次のとおりです。

支部活動の方向性と目的（案）

「スギダラ矢作川流域支部」は、「全国スギダラケ倶楽部」の活動趣旨に準じ、戦後の復興期に段階的に植栽されてきた矢作川流域のスギやヒノキを始めとする人工林をきちんと活用することにより、流域内の林産業や山村・里山に活力を生み出し、同時に、矢作川流域市民の全ライフステージを対象とした「スギダラ」活動による木づかいを推進することにより、市民生活の様々な場面において魅力的な木に彩られた生活空間を創造して「地域の人の輪」、「地域の元気」を生み出すことを目的とします。併せて、流域内の各市町村から「ウッドスタート」宣言をいただき、「木づかい推進活動」への参加と協力に向けて、流域一体となった取り組みを展開していきます。

注)「スギダラ活動」とは、流域内のスギ・ヒノキの人工林や広葉樹をきちんと活用して、あらゆる生活空間を「スギダラケ（ヒノキダラケ・広用樹ダラケ）」にする活動である。

現在、山部会のメンバーで検討している市民、行政、業界、研究機関による「木づかいガイドライン」による「さあ～しよう」の内容は次の表のとおりです。提案者、モニター、場所についてはまだメンバーによる検討（案）の段階であることをお断りしておきます。これらの名称について、公開するか迷いましたが、「全国スギタラケ倶楽部」のオープン性に準じ、また矢作川流域のリアル感を感じてもらいたいため、検討（案）のまま提示しました。これらの内容について、「スギダラ矢作川流域支部」活動の一環として展開していきたいと思えます。また、こうした「木づかいガイドライン」による取り組みを矢作川流域一体で進めていく時の思想的なものとして「矢作川ディズ」も作りましたので、併せて紹介します。



根羽村での木づかい検討会・どこでもブランコの試乗

木づかいガイドライン 市民編A（案）

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	弓矢づくりにチャレンジしよう	ネバリン	小学生	根羽
2	自分の好きな木のペンダントを作ってみよう	ネバリン	小学生	根羽
3	自分でマイお箸を作ってみよう	ネバリン	小学生	根羽
4	自分のお家の木の表札づくりチャレンジしてみよう	ネバリン	小学生	根羽
5	自分の好きな板をピカピカに磨いて自分だけの宝物にしてみよう	根羽小	大人	根羽
6	自分で薪を作ってドラム缶風呂を沸かし湯につかろう	ネバリン	小学生	根羽
7	木の葉っぱで部屋の匂いをよくしてみよう	根羽小	小学生	マイルーム
8	木のカルタ取りにチャレンジしよう	ネバリン	小学生	原っぱ
9	自分のマイツリーを見つけて名前をつけよう	丹羽	ファミ	恵那
10	いよいよ自分で森づくりにチャレンジしよう（サクラ山・花の山）	伐採者秀美	新婚	根羽
11	木の幹（マイツリー）にハンモック（どこでもマイウッドデッキも）を吊るして涼しく昼寝してみよう・山の中のコーヒータイムを楽しもう	丹羽・ハンモック 2000	ファミ	恵那
12	ツリーハウスに遊びに行こう	T建設	ファミ	根羽檜原
13	自分だけの露天風呂と足湯を手に入れよう	ネバリン	女子	根羽檜原
14	自分のお風呂に木を浮かべて香りを楽しもう	根羽小	女子	お風呂
15	日本の代表 50 種の樹木を覚えよう（葉の標本づくりにチャレンジ）	豊田森組	大学生	豊田
16	自然の生き物観察場所の看板を立てよう	豊田森組	小学生	豊田
17	日本人なら木のお風呂のある温泉につかろう（中房温泉）	中房温泉	熟年・	安曇野

		沖・松井	青年（土屋・長谷川）	
18	チェンソーアートを学ぼう	ネバリン	青年	根羽
19	色々な木のおもちゃづくりや木工工作にチャレンジしよう	ネバリン	父と子	根羽
20	きれいな川で遊ぼう	JTN	小学生	根羽
21	自分だけの滝に道を開けてマイナスイオンを浴びよう	こもれば	女子	根羽
22	木のある公園のウッドデッキで読書しよう（ブックレビューもつくろう）	ネバリン	読書人	安城
23	木と森のある素晴らしい大学に遊びに行こう（信州大学農学部ゆりのき）	信・名大生	高校生	信大・名大
24	筏（ボート）で川下りにチャレンジしてみよう	筏隊・アル	中学生	岡崎・飯田
25	木のお店案内ブックをつくろう・木のアンテナショップに遊びに行こう	沖・松井	お仲間	流域内
26	スギダラチームの輪を広げて全生活空間をスギダラけにしよう	若杉・丹羽・今村	木の人	豊田駅・トヨタ自・アイシンググループ・安城市
27	夜空を見上げ星と森の声聴こう	星と森の人	小学生	根羽森沢
28	木の科学実験で木を良く知ろう・木を使おう・木を楽しもう 輪っば弁当箱づくりにチャレンジしよう	根羽小・花野屋	小学生 ファミ	エコフルタウン 根羽
29	自分達の手で山の木を搬出して地域通貨を手に入れよう	南木	山親父	根羽・豊田
30	自分達の手で豊田から根羽まで縦走路を整備して休憩小屋を建てよう	山岳会・店	豊田隊	根羽・豊田
31	自分で取り組んだ森の健康診断を活用しよう	矢作川研	豊田人	豊田
33	木の小屋においでよ（中村好文さんと連携）	中村好文	開拓者	遊休農地

木づかいガイドライン 県・市町村編B（案）

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	山主森林経営講座に参加して自分の山を管理の仕方を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
2	森林自然観察リーダー入門講座に参加して自然観察の基本を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
3	間伐ボランティア初級講座に参加してチェンソーによる間伐を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
4	山主自力間伐講座に参加してチェンソーを使って自分の山の間伐しよう	豊田森組	豊田人	豊田
5	セミプロ林業作業員養成講座に参加して林業就業者を目指そう	豊田森組	豊田人	豊田
6	森林セミナーに参加して色々な森林を歩きながら森林管理を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
7	矢作川源流の森ウォーキングに参加して源流域の動植物を観察しよう	豊田森組	豊田人	豊田
8	夏休み昆虫観察に参加して森の生き物の生活や不思議さを体験しよう	豊田森組	豊田人	豊田
9	初めての間伐体験に参加して簡単にできる間伐を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
10	森林調査いろいろ学習会に参加して植生・林分・土壌調査の基本を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田
11	「木づかい」いろいろ発見に参加して原木きのこの菌打ちを体験しよう	豊田森組	豊田人	豊田
12	森林の草花調べに参加して高原・山地・丘陵の草花を学ぼう	豊田森組	豊田人	豊田

13	間伐してベンチの製作まで全工程を自分達で行い、公共施設に寄付しよう	豊田森組	豊田人	豊田
14	様々な山の助成金制度を活用して自分の山づくりに取り組もう	各森組	森林所有者	豊田他
15	様々な木の家づくりの助成金制度を活用して地元の木で家を建てよう	各県	お施主	各県
16	地元の木を使った住宅見学会に参加して地元の木で家を建てよう	各県・ 工務店	お施主候補	各県
17	木造公共施設を訪ねて木の使い方を参考にしよう	豊田・ 根羽・工 務店	市町村	豊田・ 根羽
18	各地で取り組まれている間伐材利用事例を参考に矢作川流域材を活用しよう	各県	市町村	
19	根羽スギの家モデル住宅に体験宿泊して木の家を楽しもう	根羽村	お施主候補	根羽
20	長野県地域発元気づくり支援金事業に応募して皆のふるさとを作ろう	ネバリン	各 NPO	根羽
21	根羽村地域発元気づくり支援金事業に応募して皆のふるさとを作ろう	根羽村	村民	根羽
22	根羽スギ柱材 50 本無償提供事業を使って有利に根羽スギ住宅を建てよう	根羽	お施主	根羽
23	市町村有林を使って新しい森づくりにチャレンジしよう(伐採・造林一貫施業)	ネバリン	森林所有者	根羽
24	市町村有林を使って子供たちに間伐を教えよう	各森組	小中学生	全市町村
25	皆で憩いの森の木道・木橋づくりにチャレンジしよう	ネバリン	市町村	根羽
26	都市の中心部に緑の憩いの公園を計画してつくろう(豊田市・番外飯田市)	豊田飯田	市町村	豊田・飯田
27	長野県 信州型エコ住宅推進事業 50~80 万円の助成を利用しよう	長野県	お施主	長野
28	長野県 信州型住宅リフォーム促進事業 20~50 万円の助成を利用しよう	長野県	お施主	長野
29	岐阜県 産直住宅建設支援制度 105,000 円相当の木材支給を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
30	岐阜県 ぎふの木で家づくり支援事業 20 万円の助成を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
31	岐阜県 ぎふの木で内装木質化支援事業 10 万円の助成を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
32	岐阜県 ぎふの木で家づくりローン支援制度 優遇金利による支援を利用しよう	岐阜県	お施主候補	岐阜
33	愛知県 あいち認証材利用促進事業 構造材・造作材等 8,000 円/m ² の助成	愛知県	お施主候補	豊田
34	材料施工分離発注方式で適正な木材製品価格で計画的に建築材料を入手しよう	豊田市	各市町村	豊田

木づかいガイドライン 業界編C (案)

NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	君も人生の方針として自然科学や農林業を選択しよう	ネバリン	中・高校生	根羽
2	君も、自分が主役になれるクリエイティブ産業・農林業の担い手になって地域を元気にしよう	ネバリン	信大・名 大・岐阜女 子大他	根羽
3	君も夢と希望あふれる地元の森林組合職員になって、豊かな自然の中で森づくりと木づかいを楽しもう	ネバリン	山の人	根羽

4	森づくりの達人（森の民）になるために様々な技能を身につけよう	各森組	山の人	全流域
5	森林簿と施業図を使って自分の山を覚えよう	豊田森組	森林所有者	豊田
6	自分の山づくりのプランを建ててみよう（オーダーメイドの山づくり）	ネバリン	秀美	根羽
7	様々な木材の搬出方法を見学しよう	各森組	山の人	全流域
8	山の技能作業手順書をマスターしよう	ネバリン	山の人	根羽
9	自分の山の木がいくらになるか森林施業プランを提出してもらおう	根羽・ 恵南	山の人	根羽・恵那
10	自然を楽しむ様々なグッズを手に入れて自然の中に飛び出そう	洲崎	女子	豊田
11	国産材の家づくりに実績のある工務店・建築士さんに会いにいこう	お施主	お施主候補	全流域
12	机やイス・家具など一生使える木製品の注文をしよう	A建設	ファミ	根羽
13	一生使える机やイス・家具など木製品を家族で製作してみよう	A建設	ファミ	根羽
14	魅力ある国産材製品のカタログを入手して木のある暮らしをはじめよう	販路開拓	ファミ	長野
15	森づくりと木づかいに取り組む、知って得して面白い魅力的な方のお話を聞きにいこう	事例集	市民	全流域
16	製材工場の端材を使って小屋づくりをしよう	ネバリン	山の人	根羽
17	住宅建築フェアを見に行こう	ネバリン	お施主候補	開催地
18	東京おもちゃ美術館を見学し児童向け木のおもちゃを研究しよう	ネバリン	保育園	東京
19	N社企画 需要創造型イベント・体感ツアー・木の感謝祭に参加しよう	N社	市民	豊田
20	N社企画 パワーホーム豊田プレミアムのコンセプトを学ぼう	N社	市民	豊田
21	木曽川流域材の家づくりのシステムを学ぼう	N社	市町村	豊田
22	オークビレッジ木の時間工作にチャレンジしよう	ネバリン	父と子	根羽
23	木の工作に必要な広葉樹を育成しよう	ネバリン	山の人	全流域
24	スギダラどこでもシリーズで世の中をスギダラけにしよう	ネバリン	市民	全流域

木づかいガイドライン 研究編D（案）

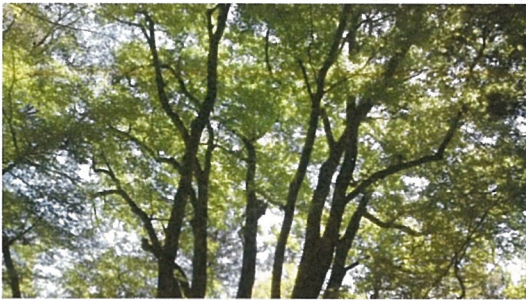
NO	内 容	提案者	モニター	場所
1	地元の大学と地域連携協定を締結して、山村・里山の課題解決に向けて学生と一緒にチャレンジしよう	信大	市町村	根羽
2	持続可能な地域づくりに向けて里山の課題を市民から集めよう	信大	市町村	根羽
3	次世代に向けた森づくりと低コスト造林を確立しよう	信大	山の人	根羽
4	スギ人工林の植物種多様性を評価し、生物多様性保全に留意した森づくりに取り組もう	信大	森林所有者	根羽
5	伐採後に発生するスギ針葉から精油を抽出して商品化に取り組もう	信大	女子	根羽
6	農林一体化事業を支援する地理情報の可視化手法を開発しよう	信大	市町村	根羽
7	山村の聞き書き調査を行い、山村文化を発掘し継承しよう	実践者	対象者	根羽
8	雪害被害林の今後の施業指針を確立しよう	信大	市町村	根羽

9	集落周辺の森林について保残木マーク施業等景観林施業を確立しよう	ネバリン	集落	根羽
10	スギ重ね梁の実用化を実現させよう	ネバリン	工務店	根羽

～人生を楽しみ愛する家族と共に幸せに暮らす

森林や木とそれを育む矢作川の流れ共に生きるライフスタイルへの誘い

矢作川ディズ～



森林や木とそれを育む矢作川の流れ共に生きるライフスタイルはとても素敵です。身近な生活空間の中に魅力的な木の製品をたくさん取り入れてみましょう。矢作川の流れを見つめ、自然の息吹に耳を傾けてみましょう。愛知・岐阜・長野の3県を流れる矢作川流域圏を対象としたこの「木づかいガイドライン」には、そんな森

林や木の魅力や、それを育む矢作川流域の自然環境に出会い、流域に暮らすひとり一人が未来にむけて互に関わり合いながら、豊かで魅力的な地域社会を目指して活動していく（楽しむ）ヒントがたくさん書かれています。

この本を作った私たちは、森林や木の魅力や矢作川の自然環境をたくさんの方々に伝え、森林や木や矢作川の自然環境と触れ合うことで市民の輪が広がり、そのことで地域が元気になっていくことを願っている一市民です。それぞれの様々な立場や経験から、森林や木や矢作川の流れに対する愛情や想いや妄想もたっぷりこめて、矢作川流域に住む方々のために、もっと森林や木を好きになろうよ、もっと地域の木を使ってみようよ、もっと森林や木と共に生きている人達と友達になろうよ、そして地域に住むひとり一人が矢作川の自然環境の素晴らしさを共有し、皆で未来に向けて魅力的な森林・川・海・街になるようにアクションを起こし育てていこうよ、という考え方を基本にして市民の目線からこの本を作りました。



根羽村の子供が魚つかみの先生です

この本を読むときっと、あなたのライフスタイルが素敵な森林や木の製品に彩られることになるでしょう。訪ねてみたくなる森林やお店、森や木と共に生きている人と直接会って、話してみたくなることでしょう。もっと多くの同じ気持ちを持つ仲間と出会って、魅力的な地域づくりに参加してみたくなるでしょう。そんなことを通して、あなたの心が今よりもっと明るく朗らかにそして大きく広がって、森林や木とそれを育む矢作川の流れと共に生きていく素敵なライフスタイルに目覚められることを期待しています。



山村の若者たちが楽しい出会い企画を作りました

こんなライフスタイルは、きっと私たちの暮らすこの矢作川の上流から下流に暮らす人々の交流や結びつきを高めることになるでしょう。今まで以上に流域に住む人々への尊敬や感動、そして地域に対する思いやりの心、協力しあうことの大切さに気がつくことになるでしょう。こうしたライフスタイルの基本となるような、地域とそこに暮らす人々と共に生き愛する気持ちが、矢作川の流れを地域の心の絆として、私たちにとって本来あるべき、そして未

来に亘って暮らしやすい持続可能な流域を作り出していくグッドスピリットであることに違いありません。

私達の故郷の源である矢作川の流れを見つめ、いつまでも美しい森林と川と海に囲まれて人生を楽しみ、愛する家族と共に幸せに暮らすことができるように、今こそ流域に暮らすひとり一人の住民の意識改革から、この豊かな自然環境を持続可能な財産として皆の手で育み、ずっと暮らしていたくなる魅力的な矢作川流域的生活空間「矢作川ディズ」を創り上げていきましょう。

4 ウッドスタートの明るく楽しい未来への展望

矢作川流域における「木づかいガイドライン」の内容や「矢作川ディズ」の思想は、市民から始める「ウッドスタート」と言っても過言ではありません。国土交通省豊橋河川事務所で取りまとめを行っている「矢作川流域圏懇談会」ですが、市民、行政、業界、研究機関が毎月1回のペースで会合しており、これほど多様な参加者でこれだけ頻繁に会合している事例は珍しいのではないかと思います。ただ、愛知・岐阜・長野の各県の職員と各市町村職員の出席については、会合のタイミングや出席の必要性から必ずしも出席率は高いとは言えませんが、こうした里山の担い手の把握・連携、森づくりや木づかいについて、流域を意識して広い範囲から関係者が集まることは、これから推進していきたい「ウッドスタート」にとっては良いことだと思います。

「ウッドスタート」とは、家庭や職場など身近な生活空間に意識して木のある場面を作り出そうとする木づかい活動で、多くの企業やいくつかの市町村で「ウッドスタート」宣言がなされて、すでに活動が始まっています。「木づかいガイドライン」や「スギダラ矢作川流域支部」では、こうした「ウッドスタート」を推進していくきっかけづくりになれば良いと考えています。

「木づかいガイドライン」検討時にすでに多くの意見が出されていますが、山部会に参加されるような方々の全員が青少年期に自然の中で過ごしたことや、木工作、山登り、自然景観に対する



感動等、様々な自然や森林や木に出会った楽しい経験を持っていることがわかりました。こうした経験が青少年時の豊かな感受性によって受け止められて、現在の森林や木に結びつく職業に就いている構図が見られました。このことは、青少年期に自然や森林や木に出会うことの重要性を感じさせます。これらのことから、普段、森林や木に接している山村の「森の民」等が、下流域の青少年に自然や森林や木に出会う機会を作ったり、森林や木と過ごす時間の豊さを伝えてあげることが重要であると思います。

また、青少年は大人の背中を見て育つものなので、やはり大人が森林や木の世界と仲良しであること、森林や木と共に過ごす時間を楽しんでいるところを見せてあげるべきでしょう。

森林を扱う考え方や技術、木を工作する技能、このようなものはあらゆる機会をとらえて、青少年に伝えたいものです。こうした活動は、世代間の隔たりを超えて可能ですし、むしろお年寄りや熟練技能者のすごい技を青少年に伝える、というのはとても理想的だと思います。青少年は技能を引き継ぎ、お年寄りや熟練技能者は自分の技を教え伝えていくことで、自己の存在感・経験値の肯定感・生きがいを感じられることでしょう。



こうした、矢作川流域のいたる所で、木を絆とした地域や世代を超えた一体感を感じられること、自然や森林や木やそれらを教えてくれる方々への共感や尊敬、木の感謝祭の開催、自然や森や木のイベントを皆で考えて実施してみることで、等が始まると、とても素敵です。こうした、流域内で取り組まれる様々な「木づかい」活動が地域や人の輪をつくることに、直接結びついていくことでしょう。

最後にこうした「木づかいガイドライン」や「スギダラ矢作川流域支部」の発足をきっかけとして、各地で「ウッドスタート」の取り組みを発進させ、世代や行政の垣根を超えた矢作川流域の方々同士の人の輪を育成し、流域の森林資源の活用と森や木とのたくさんの出会いの場をつくることによって、矢作川流域を明るく楽しい未来に導きたいと思えます。最後まで読んでいただき、どうもありがとうございます！！今後共、よろしくお願いします。





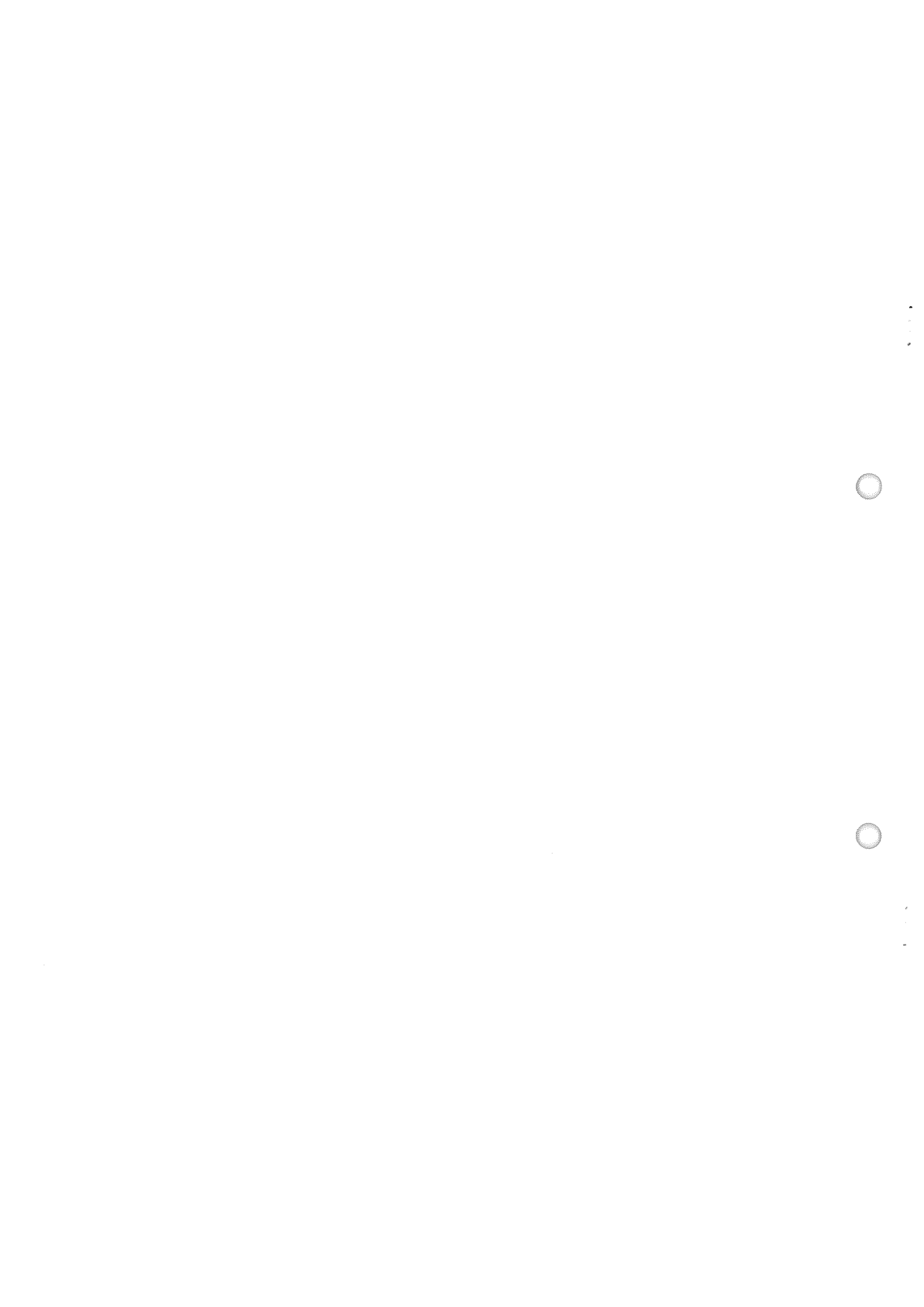
根羽村の木づかい推進担当者紹介
根羽村振興課長 小木曾秀美(右)
根羽村森林組合参事 今村豊(左)

☆☆ **山は素敵だ** ☆☆

連絡先

根羽村役場振興課 0265-49-2111

根羽村森林組合 0265-49-2120



山・川・海 流域一体の川づくり

～矢作川流域圏懇談会～

国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所 西原 均

豊橋河川事務所では、矢作川流域の方々のご意見を踏まえて平成21年7月に国が管理する区間の「矢作川水系河川整備計画」を策定した。今後、矢作川における治水、利水、環境、維持管理の課題を解決し目標を達成していくためには、川の中だけの視点ではなく、水つながりという視点で山から海までの流域圏全体を対象として、多様な課題の解決に向け、市民、関係機関、有識者、行政と一緒に話し合い、役割をもちながら連携・協働していくことが必要であり、これにより調和のとれた流域圏全体の発展に繋がると考えている。そのため、矢作川流域では、平成22年8月に「矢作川流域圏懇談会」を設立し、様々な議論や取り組みを行ってきている。

1. はじめに

矢作川では、当面の具体的な川づくりの内容を定める「矢作川水系河川整備計画」を、学識経験者等からなる矢作川流域委員会での審議、地元住民との意見交換会、関係自治体との協議等を踏まえて、平成21年7月30日に策定したが、策定段階において様々なご意見を頂いた。

その意見は、大きく二つあり、一つは平成12年の恵南豪雨（東海豪雨）により矢作ダム湖に大量の流木の流入や土砂の堆積がみられた状況などから

「水源地域から三河湾に渡る矢作川流域圏に係わる治水、利水、環境、土砂管理、

森林荒廃、三河湾再生、地域活性化等の諸課題の解決は、河川管理者のみでは困難である。」もう一つは「河川管理者が「矢作川水系河川整備計画」の目標を達成するためには関係者間の連携を図らなければいけない。」ということであった。



図-1 矢作川流域図

これを受けて、矢作川水系河川整備計画の中で、民・学・官の連携・協働による諸課題解決に取り組む必要があることが明記された。そこで、市民、学識経験者、行政等の関係者相互が“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもと情報共有・意見交換を行い、多様な問題解決に向けて連携した取り組みを総合的に進める新たな枠組みとして「矢作川流域圏懇談会（以下「流域圏懇談会」）」を平成 22 年 8 月 28 日に設立した。

2. 矢作川流域圏懇談会の組織形態

矢作川流域圏とは、矢作川流域、その他流域に接する海域、及び矢作川が氾濫する地域や矢作川の水利用地域を含む一体的な地域としている。

流域圏懇談会は、「全体会議」「地域部会」「市民会議」を基本とし、「ワーキング」、「勉強会」、「市民企画会議」から構成される。

「全体会議」は、各地域部会で検討した課題やその解決手法を流域全体でとりまとめ、情報を一元化すると共に、各地域部会へフィードバックするもの、「地域部会」は、流域圏を山・川・海の3つに分け、それぞれの地域特性に応じた課題等を意見交換する場、「市民会議」は、市民が独自に会議を開催するもので、そこから意見・課題をもって、地域部会に参加する。

また、「ワーキング」は地域部会の活動をより具体化するために毎月1回程度の頻度で開催している。「勉強会」や「市民企画会議」は市民が中心となり課題等に関する理解を深め議論を円滑に進めるための場となっている。

現在（平成 26 年 5 月時点）の参加組織は、

- ・個人 19 名、市民団体 37 団体
- ・民は、森林組合、漁業協同組合、土地改良区、中部電力(株)、矢作川沿岸水質保全対策協議会等の 14 団体
- ・学識経験者は 12 名
- ・県、市町村は、愛知県をはじめとする 3 県 13 市 4 町 2 村
- ・国の機関は、林野庁中部森林管理局、農林水産省東海農政局、環境省中部地方環境事務所、国土交通省中部地方整備局の 3 省 1 庁である。

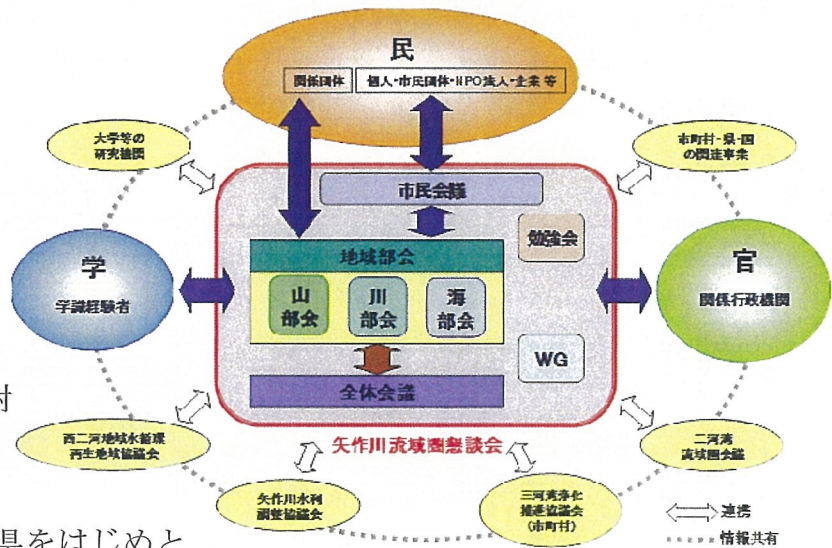


図-2 流域圏懇談会組織図

3. 様々な課題の解決に向けた具体的な取り組みについて

流域圏懇談会では、当面の活動を9年を目処に行うこととし、3年を一サイクルとして進めている。現在は設立後5年目になり、組織や体制づくりを終え、課題の解決に向けた取り組みを行っている。

山部会では、①人と地域の問題や②森の問題に対して、4つの検討テーマを設けて話し合いを進めている。

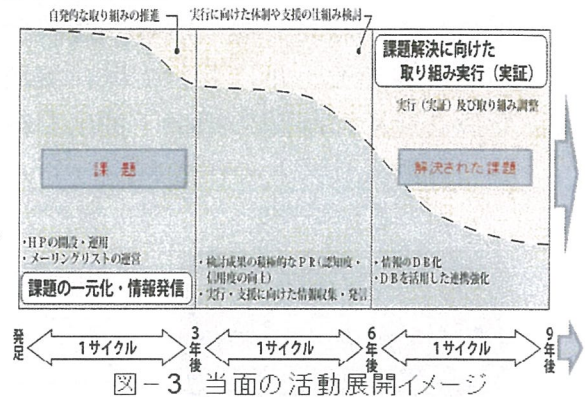


図-3 当面の活動展開イメージ

<テーマ>

- 山村再生担い手づくり
- 山村ミーティング
- 森づくりガイドライン
- 木づかいガイドライン

<解決手法>

- 森林の適切な管理は山村再生が重要。まずは人づくりに取り組む。
- 山村再生を支援する取り組みへの参加・情報共有を行う。
- 流域圏として統一性のある森林管理を行うためのガイドラインを作る。
- 矢作川の森の恵みが中下流・海まで届くガイドラインを作る。

現在は主に「山村再生担い手づくり事例集」の作成や「木づかいガイドライン」の策定に向けた検討を行っている。

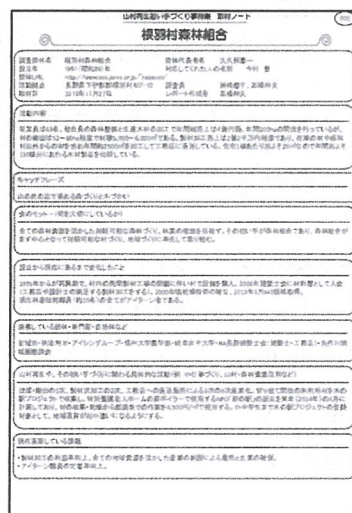


図-4 山村再生担い手づくり事例集

川部会では、当面のテーマを2つに絞り、3つのモデルを設定した上で、話し合いを進めている。本川モデルでは、①矢作川本川と支川の移動障害の解消（家下川、加茂川等）、②瀬や淵の改善（白浜地区）等を進めている他、関係機関が実施する事業に関する意見交換を行っている。家下川モデルでは関係機関にお

ける情報共有を進め、生き物の移動障害を解消するための具体的な取り組みを行うための意見交換や流域圏懇談会としての理想を形にする取り組みを行っている。地先モデルにおいては、流域圏において活動している市民団体との意見交換を進め、課題の把握・抽出を行うとともに、様々な分野における矢作川流域の専門家リストの作成を行っている。

<テーマ>	<解決手法>
テーマ1： 生き物の棲みやすい 川づくり（上下流問題）	本川モデル： 課題と解決の方向性の検討、個別課題の取り組み
テーマ2： 地先の課題	家下川モデル： 課題と解決の方向性の検討、個別課題の取り組み
	地先モデル： （仮）専門家リストの作成、個別課題の取り組み

海部会では、当面のテーマを4つに絞って検討を進めている。ごみ・流木問題では積極的に周辺の関係団体と活動を連携し、「ごみ・流木調査票」を策定し、矢作川流域におけるごみ・流木の調査を行っている。海と人との絆再生では、流域の子供達と積極的に交流し、“人が海に近づきふれあう”ための調査を進めている。豊かな海の生物調査や干潟・ヨシ原の再生については、ダム砂を用いた干潟環境の改善に向けた取り組みを進めている。

<テーマ>	<解決手法>
ごみ・流木の課題	被害軽減： 干潟・水辺のごみ、流木対策検討に向けた調査
豊かな海の生物調査	理想追求： 市民、学識等の様ざまな調査より学習・分析
海と人の絆再生	人づくり： 心理的・物理的アクセス改善、学校等との連携
干潟・ヨシ原再生	自然再生： 川と海の連携による干潟再生

4. 課題解決に向けた部会連携について

課題の解決にあっては、山・川・海の3部会の積極的な連携が必要であり、3部会に共通する課題を流域連携テーマ（①ごみ・流木問題②土砂③木づかい）として定め、話し合いを進めている。連携テーマの検討に際しては、各テーマ毎の代表担当者を中心に進めている。

5. おわりに

流域圏懇談会は、来年度で6年目を迎え、第2サイクルの最終年になるため、課題解決の一つの区切りになると考えている。今後は、各地域部会での取り組みが流域圏一体となった取り組みに近づくよう進めていきたい。また、活動成果の積極的なPRや情報発信などにより更なる組織づくりと取り組みの推進を図りたいと考えている。

根羽村からはじめる矢作川流域市町村ウッドスタート宣言

長野県根羽村長 大久保憲一

今年の紅葉は、紅い葉っぱの色が特に映えて、見る期間もとても長く感じられました。矢作川の源流にある根羽村は、スギ・ヒノキの人工林が73%を占めていますが、毎年秋の紅葉時期には、緑の中に四季を強く感じられる素敵な場所です。



根羽村は、長野県の最南端に位置し、愛知県豊田市、設楽町、岐阜県恵那市に隣接し、愛知県で一番高い山である標高1,415mの茶臼山を県境に持つ地域であります。この茶臼山を源流として、三河湾へ注ぐ延長118kmの一級河川「矢作川」は、古くから流域間の交流を支えてきました。流域には、明治13年(1880年)に明治用土地改良区が矢作川から用水を開削し、日本デンマークと呼ばれるまでに発展した安城市があります。安

城市にある明治用土地改良区では、「水を使う者は、自ら水をつくれ」との崇高な理念のもと、大正3年(1914年)に水源地の根羽村に水源涵養林427haを買い求め、植林活動を通じて水源涵養林の整備育成に積極的に取り組んできました。その活動は、今も森林整備に加えて、様々な環境教育の実践や、地域間交流にも積極的に取り組んで頂いております。

また、当村では明治時代から村有林を村内全戸に貸付林として2.5ha、分収林として3.0haの合計5.5haを貸し与え、村民こぞって植林を行い、森林整備に力を入れてきました。大正9年(1920年)には、村有林1,297haを国と分収林契約(官行造林)を行い、昭和30年代から、当時の村の収入の約4割に相当していたこれらの森林からの立木の販売収益によって、役場庁舎や学校、上下水道等の様々な公共施設整備を進めることができました。古くから山づくりを進めて当村では、「親が植え、子が育て、孫が伐る」という、親子三代にわたる持続的な林業経営哲学がしっかりと根付いてきました。村民全員が山からの恩恵にあずかり、山を大切にしてきたものであります。昭和50年代に入ってから、これら官行造林地の伐採予定地も水源地近くとなってきて、村ではこの森林を伐採せずに、立木を国から買い取って保存するという方針転換を行いました。このことは、本来伐採時には収益を国と村が折半する制度であるので、村が買い取ることは村の収益がないことにあわせ、村にとっては2倍の負担となります。村では数年間立木の購入を続けてきましたが、昭和8年に植栽され、平成3年に伐採予定となっていた48haの森林については、矢作川流域にとって貴重な水資源の役割を果たしており、水源地の保護育成のためには、何としても立木を買い取る以外に方法がなかったわけでありませ



しかし、購入については助成制度が全くなく、村単独の財源での購入は困難な状況にありました。この時、安城市の協力と理解を頂き、本来村が負担すべき資金を安城市が負担して頂けることとなり、矢作川上流の水源確保と森林育成を目的とした「矢作川水源の森」が誕生しました。これは、平成3年に森林法が改正され、上流と下流の自治体間での「森林整備協定」ができることが定められての、全国第一号の取り組みとして注目を集めたところであります。



山村では、山を育て、土地を耕し、そこから様々な自然の恵みを頂きながら生活がなされてきました。いつしかそうした自然のサイクルが破壊され、急激な過疎化の波が押し寄せてきました。根羽村では、森林から多くの恩恵を受けてきたこともあり、こうした厳しい状況の中でも、山づくりに一生懸命取り組んできました。長引く木材価格の低迷や産業構造の激変から、村でも林業で生きていくのは厳しい状況となってきました。そんな中、村内に7軒あった製材工場も次々と姿を消し、平成7年には唯一残っていた一軒の製材工場も閉鎖することとなりました。今まで営々と山づくりを行ってきた根羽村から製材工場が消えることは、「林業立村」を目指す当村にとって大きな痛手となってしまい、何とかしたいという思いで村がこの製材工場を購入したところから、根羽村の新たな林業への挑戦が始まったわけであります。

時を同じくして、国産材の時代が到来したとか、地域材を使おうといった全国的な機運も高まりつつある時期でありました。丸太を加工して付加価値を付ければ何とかなるだろうという安易な考えは、スタート当初から厳しい現実と直面することとなりました。一方、木材を使う消費者側である設計事務所や工務店の皆さんは、地域材を使おうとしてもどこにあるのか、その品質や価格は保証されているのか、注文にきちんと対応できるのかなど、多くの疑問を抱えていました。

私たちは、山元である生産者側と、家を建てようとする消費者側のお互いの情報が全くなかったことに気づいたわけでありました。そこで、それぞれ関係する者が集まって協議を進めていく中で、木を育てて丸太を生産する「第一次産業」、丸太を住宅用材として加工する「第二次産業」、住宅を建てようとするお施主様の現場まで製品をお届けする「第三次産業」を、地域内で完結させた「トータル林業」の仕組みを構築することができました。このことによ



って、家を建てようとするお施主様の情報を、設計事務所や工務店を通して、山元である森林組合と共有することが可能となり、消費者には安全で安心な材料が確実に手に入り、山では間伐によって適正な森林が管理でき、加工販売することによって森林組合で雇用が確保することが可能となり、村内で林業が再度「業」として復活できる確かな手ごたえを感じることができるようになりました。

今、全国の源流地域と言われる山村では、流域から人が消え、集落の空洞化が大きな問題とな

っています。このことによって、山に手が入らなくなり、山が崩れ、水の貯水機能を担ってきた山間地の農地が荒れ、水源地域が守れなくなってきています。人の営みの原点である源流地域から伝統や文化が消滅し、川の流れが途切れ、営々と築かれてきた上流と下流のつながりが、今まさに消えようとしています。



日本の原風景である「ふるさと」が消えることは、まさしく国土の崩壊に直結することになり、こうしたことから、どの地域にも人が住み続けなければならないと考えているところであります。根羽村では、地域に人が住み続けるためには、働く場所や収入を得られる仕組みづくりなどの「地域内での雇用の循環」、地域内の商店やガソリンスタンドや理容店などが生き残るための「地域内での経済循環」、教育や福祉、医療など必要最低限の「地域内でのサービスの循環」の仕組み

作りと、これを地域内で動かすための住民の意識の醸成に力を入れています。この地域内の循環と、流域連携によつての地域づくりが、生き残りをかけた根羽村の挑戦であります。そして何より大切なことは、私たちが自分たちの住む地域に誇りと自信を持って自ら実践し、そのことを「次世代を担う子供たち」にしっかりと伝えていくことであると思います。

高齢化率が47%を超える根羽村では、平成27年3月開所を目途に、デイサービスや特別養護老人ホームを併設した高齢者福祉施設の整備を進めています。この施設は、根羽スギ・根羽ヒノキを100%、約500㎡の建築材料を使用した木造建築となっています。スギの産地であることから、構造材、天上、壁、家具等にはふんだんにスギが使用され、床は車椅子にも対応できるヒノキの圧密フローリングを使用しています。また、床暖房や給湯には薪ボイラーを導入し、ここで使用する薪は、間伐材や山での端材を「木の駅プロジェクト」のメンバーが集め、乾燥して準備されます。出荷時にはそれぞれに地域通貨が支払われ、村内の各商店等で利用されて行きます。さらに、乾燥した薪をボイラーへ投入して管理する部分についても、新たにNPO「森の民ねばりん」が設立されました。地域にある資源に付加価値を新たにつけて村内に経済循環をおこし、働く機会も創出できるといった取り組みに大きな期待を寄せているところであります。

また、根羽村は流域にある企業や自治体、市民団体等多くの皆さんとの交流を進める中で、スギの木工ペンダントづくり、表札づくり、水鉄砲づくり、弓矢づくり、木ハガキの利用、割りばしづくり、チェーンソーアートの展示、どこでも足湯の作製、薪割り、薪のドラム缶風呂、小中学生を対象とした木育活動の実践など、普段身近に使うものから木の魅力を伝えて、木と共に過ごす自由時間の素晴らしさや、豊かな「木



のある暮らし」の楽しみを伝えるために、様々な取り組みを実践し大きな人気を得ています。



「木づかい推進活動」を川の流りに沿って「じわじわ」と、そして「急激」に進めていきます。そして今ここに、こうした取り組みを流域の皆様に対して明確にするため、流域の樹種であるスギ・ヒノキ・広葉樹等をふんだんに使った生活空間の実現と、「木のある暮らし」の楽しみを広く伝えていくことを目的とした「ウッドスタート」宣言をいたします。

最後になりますが、根羽村では下流域への水資源の安定供給を含め、自らの豊富な森林資源の恩恵を皆様のもとにお届けし、地域資源の活用による持続可能な村づくりを目指しています。上下流連携による地域森林資源を活用した「木づかい推進」が、流域の地域産業を育成し持続可能な村づくりに大きな貢献を果たします。流域の皆様には、こうした水源の村の活動や考え方に、矢作川の流れを絆とした流域の仲間として共感、賛同されることを希望いたします。同時に、私達と共に「木づかい推進活動」に参加され、「ウッドスタート」宣言を行っていただき、流域の樹種であるスギ・ヒノキ・広葉樹等をふんだんに使った生活空間の実現と、「木のある暮らし」の楽しみを広く地域住民に伝える活動に取り組んでいただければと思います。

どうか、今後とも「水源の村 根羽村」に対しましてご支援・ご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。



矢作川の森づくりと木づかいに思うこと

洲崎燈子（豊田市矢作川研究所）

このたび日本全国スギダラケ倶楽部の矢作川流域支部が設立の運びとなりましたことを大変嬉しく思っております。9月に根羽村で初めて若杉さんの、温かくすてきな木工デザインとおやしギャグに満ちた講演をお聞きした時の衝撃を思い出します。何の変哲もない間伐材がちょっとした工夫でおしゃれな家具に早変わりしてしまうこと、若杉さんの豊富なアイデアと様々な人をまきこむ情熱、そして「スギダラは山と川下の悩みを杉でつなぐ」という言葉に深い感銘を受けました。矢作川流域のおよそ1/3の面積を占める人工林は約2/3がヒノキ林なので、ヒノキダラとスギダラで矢作川の上下流をつなぐお手伝いをしていきたいと思っています。

私の勤める豊田市矢作川研究所は1994年に設立された愛知県豊田市の研究機関で、矢作川の豊かできれいな水と流域住民に潤いを与える自然環境作りをめざした調査・研究活動をしています。現在魚類、水生生物など異なったジャンルの研究者が7名おりますが、私は陸上植物の担当者として、流域の植生の現状と、その望ましい管理手法を調べています。また、市が行う公共空間の緑化や緑地管理に関してアドバイスをしたり、市民が主体となって行う森づくりのお手伝いも行っています。川の研究所なので、これまでにさまざまな河畔林づくりに関わってきました。

豊田市内の矢作川の河畔林では、多くの水辺愛護会が活動しています。多くは定年退職された男性が中心になって、河辺にはびこるタケ類の伐採や草刈り、ゴミ拾い等を行ってくれています。メンバーの多くは子どもの頃、川に親しんで育ちましたが、大人になって会社勤めを始めると、川から離れた生活をするようになりました。しかし退職して時間ができて、ふと身近な河辺を見ると、荒れてジャングルようになった林が目に入り、「これはいけない。昔慣れ親しんだ美しい河辺を取り戻したい」と愛護活動に関わるようになるのです。竹チップや竹炭、タケノコの生産に取り組むグループもあります。嬉々として活動に取り組まれる様子には、本当に頭が下がります。

私は彼らのところに行って、これまでの調査結果に基づき、「人も親しみやすく、もともと河辺にいた生き物もすみやすい空間を作りましょう、そのために春～夏からは草を全部刈るのではなく、一部刈り残すと、小動物が繁殖できる環境が残せますよ」「タケは皆伐でなく間伐すると、外来植物の増加を抑えられますよ」「サクラを植えたり花壇を作ったりしないで、自生する在来植物を大事にしましょう」などといったアドバイスをします。そして、豊田市は行政の立場から愛護活動を支援し、交流や学びの場を提供します。

これは河畔林の例ですが、どんなタイプの林であっても木づかいは森づくりとセットで進めることが必要だと思います。持続可能な木づかいの実現は元金に手を付けず、利息を活用できる森づくりができるかに成否がかかっています。いまの林の姿と望ましい将来の姿を思い描き、そこにすむ生き物たちに配慮し、その中から木の使い方を編み出していくのです。それにはまた、地元の方々とのタッグが欠かせません。地域の林が生き生きとよみがえることを幸せに感じる人たちと手を携え、そうした人たちを増やすことが、持続可能な木づかい体制をより強固なものにするのだと思います。

矢作川流域の半分近くを占める豊田市は、地方自治体としては大変先進的な森づくり条例を制定

し、人工林の間伐を進めています。しかし木づかいは進んでいません。日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部の設立が、この地域に魅力的な木づかいの道筋を作り、流域材で上下流をつなぐ起爆剤となることを願っています。

写真説明：水辺愛護会と美しく整備された河辺（愛知県豊田市扶桑町 古峯水辺公園）



木づかいと共に進める矢作川流域単位の森林づくりとその考え方

蔵治 光一郎

東京大学 演習林 生態水文学研究所長

はじめに

国土交通省中部地方整備局豊橋河川事務所が2000年に組織した「矢作川流域圏懇談会」の山部会では、「矢作川の恵みで生きる」を出発点（合言葉）として議論を進め、課題を大きく「人と山村」「森林」の2つに設定した。そしてそれぞれの課題を解決するための手法の一つとして、流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくために「森づくりガイドライン」を策定することとし、おおむね月1回のペースで行われるワーキンググループ会議、地域部会、全体会議等において議論を進めてきた。筆者は山部会設置当初から、この「森づくりガイドライン」策定の担当者を務めてきた。

筆者は、「森づくりガイドライン」とは、「矢作川流域単位の森林づくり」を実現するための手段の一つであると考えている。流域単位の森林づくりという考え方の歴史は古いが、近年の急速な国民の価値観、ライフスタイルの変化に伴い、その考え方の中身も大きく変容しつつある。本稿では、流域単位の森林づくりの考え方の歴史を振り返り、矢作川流域単位の森林づくりの未来を展望することを試みる。

流域単位の森林づくりの考え方の歴史

森林を流域単位で管理しなければならないという考え方は、日本では飛鳥時代にさかのぼる。672年の壬申の乱の勝利により政権を掌握した天武天皇は、676年に飛鳥川の水害対策として、上流の南淵山、細川山の伐採禁止令を出した。これは政府として正式に災害防止を目的に森林の伐採を規制した最初の制度と言われている。江戸時代の1666年には4老中連名で諸国山川掟が出された。これらの制度は、上流の森林の過剰利用により土砂が河川へ流出し、河床が上昇したことにより洪水時の水位が上昇し、水害の頻度が高まったことが背景にある。下流の水害を減らすために、流域単位で森林の過剰利用を抑制しなければならないという考え方である。この考え方は江戸時代、熊沢蕃山や河村瑞賢らによって思想の段階まで高められ、「治山治水思想」という言葉が社会に定着した。この思想は明治時代の1897年の森林法制定に伴う水源涵養・土砂流出防備保安林の設定によって法的に位置づけられ、現在に至っている。

次に生まれた考え方は、下流に「清浄にして豊富低廉な」水の供給をするために、上流域の森林の過剰利用を抑制しなければならない、という考え方である。この考え方に基づき、水源林という言葉も生み出された。まず平安時代の821年に、わが国初の水源林保護制度といわれる水源禁伐の官符が出された。この官符の背景にあった考え方は、大河川の

水源は鬱蒼とした森が茂っており、小河川はハゲ山の丘陵から流れているので、もし森が伐採されてしまうと河川の水が涸れてしまう、という「科学的に誤った認識」に基づいたものであった。この認識は土砂流出による水害の激化という「科学的に正しい認識」と結び付けられ、社会的に広く認識されるに至った。明治後期には農業用水団体が水源林を購入する事例があり、庄内赤川（鶴岡市、1908～、1319ha）・青竜寺川（鶴岡市）・明治用水（矢作川流域、1908～、525ha）・鹿妻穴堰（雫石町、233ha）の4つの事例が有名である。明治用水は矢作川上流の森を購入したが、その際の合言葉は「水を使う者は自ら水をつくれ」であった。また東京府は清浄な水道水を得るため、1901年に多摩川上流の水源林を購入した（現在の面積は21,629ha）が、これは多摩川の上流域が東京府の権限の及ばない山梨県内であったことが影響している。その後も全国の多くの水道事業体が水源林を購入し、管理している。

現在の科学では、雨が多い場所には鬱蒼とした森が生育し河川が大きくなり、雨が少ない場所はハゲ山になりやすく河川が小さくなること、森が伐採されれば、河川の水量は逆に増加することが証明されている。このような科学的な事実は、残念ながら社会になかなか受け入れられず、多くの人々が誤った認識を正すことができないまま、今に至っている。

いずれにしても、流域単位の森林づくりの考え方は、下流の人々の生活と上流の森は、河川によってつながっており、河川がもたらす恵みである水資源や、災いである水害や水不足は、上流の森林の過剰利用によって悪化する、という論理に長い間、支えられてきた。

流域単位の森林づくりの新しい考え方

それに対して近年、流域単位の森林づくりの新しい考え方が芽生えてきた。その背景には、木材の需要が減少し、価格も下落し、木材生産を目的とした森林伐採が不活発になり、森林の過剰利用とでもいうべき状況が出現したことがある。上流域の山村地域の中には、森林利用が地域経済の中で大きな位置を占めている地域があり、そのような地域では森林の利用が過少になれば、地域経済は衰退の危機に瀕することになる。国は所得の再分配により、このような地域を支援しようとしてきた。1975年には林野庁が「緑のダム」という言葉を生み出し、1985年には国レベルの水源税構想が示された（実現には至らず）。時を同じくして、長い歴史があつて日本人の心の奥底まで浸透している「森林の過剰利用は下流に災いをもたらす」という論理を援用し、下流の都市住民が上流の山村を支援する、という考え方が萌芽してきた。1978年には水源林対策を明記した矢作川水源基金が設立され、1991年の森林法改正で森林を流域単位で管理するシステムが法的に位置づけられた。1993年には豊田市の水道事業審議会が水道水源保全の答申を行い、1997年には林政審議会が「国有林野事業の抜本的改革の方向」を発表、2001年の森林・林業基本法により「公益的機能重視」の政策転換がはかられた。2003年には高知県が全国初の「森林環境税」制度を開始し、10年間で35都道府県に広まった。

この考え方を都市住民に正しく理解してもらうには、森林の過剰利用だけでなく、過少

利用も、水害や水不足といった災いを引き起こす可能性が高まるので、公的資金を投入してでも支援する価値があることを証明する必要がある。科学的にこのことを証明することは容易ではなく、長い時間がかかるが、現代社会の急激な変化はそれを待ってはられない。森林の過少利用がいつの間にか「森林の荒廃」と呼ばれるようになり、「森林の荒廃」は「保水力の低下」をもたらす、という科学的根拠の不十分な言説が流布されるようになった。

森林の過剰利用によるハゲ山化を「森林の荒廃」と呼んできた専門家にとっては、人工林が過少利用となり、間伐されずに過密状態で放置されることを、同じ「森林の荒廃」という言葉で呼ぶことなど、考えられなかった。この両者は、科学的には、あまりにも異なるものだったからである。森林の過剰利用を「森林の量的荒廃」、森林の過少利用を「森林の質的荒廃」と呼んで区別する専門家も登場したが、この使い分けも都市住民に浸透したとはいえない。

森林は、もはや都市住民にとって身近な存在ではない。都市住民が容易に認識できる現象ではなく、科学的証明も難しい森林と河川の因果関係は、実際に災害が発生して初めて広く人々に認識され、因果関係を証明するデータを得る必要性がようやく認識される。矢作川流域では有名な「流域は一つ、運命共同体」という合言葉は、上流の森林とは直接関係のない、土石等採掘業者や窯業原料供給業者が濁水を垂れ流すことによる河川の水質汚濁を防止する運動に由来していたが、2000年の東海豪雨以降は、上流の森林と下流の都市は運命共同体であるという意味でも使われるようになった。この災害では2014年広島土砂災害と同様に、風化花崗岩のマサ土の表層崩壊、いわゆる「沢抜け」が数多く発生したが、その多くが過少利用により「質的に荒廃」した森林で起きていた。この事実を目の当たりにした下流の都市住民は、安心・安全な生活を求めて立ち上がり、自らデータを収集、研究者や行政も、因果関係を証明するためのデータを収集し始めた。

このように、流域単位の森林づくりの新しい考え方は、河川がもたらす恵みである水資源や、災いである水害や水不足は、上流の森林の過剰利用のみならず、過少利用によっても悪化する、という論理に支えられている。もしそれが本当であれば、過剰利用も過少利用もいけないということになり、残された選択肢は「適度な利用」ということにならざるを得ない。

木づかいと共に進める流域単位の森林づくりの考え方

残された選択肢「適度な利用」とは、河川がもたらす災いである水害や水不足、森林の立地する斜面が崩れることによる土砂災害やダムへの土砂流入をこれ以上悪化させることのない範囲で、森林を最大限、利用することである。人工林について言えば、木材生産に適していない急勾配の土地や、新たに道を作らない限りアクセスが悪い立地条件の人工林は、木材生産をあきらめた方が賢明であり、逆に、現状が人工林でなくても木材生産に適した土地では、積極的に木材生産を目指す場合もあるかもしれない。

およそ、あらゆる第一次産業について言えることだが、現代日本において天然資源の「適度な利用」を実現することは、極めて難しくなっている。ほとんどの消費者は安ければ安いほどよいという消費行動を取るため、商品を守る側もできるだけ安く売ろうとする。価格低下のしわ寄せが中間の流通や加工の業者にとられ、しわ寄せは生産者に来る。とにかく安く買い叩かれるだけなら、生産者はやる気をなくすだろう。かくして、日本の第一次産業は「過剰な利用」か「過少な利用」か、という両極端な状態の二者択一を迫られる傾向にある。TPP などによって低価格の農林水産物が流通するようになれば、この傾向に拍車がかかるであろう。森林の利用についても同じであり、過少利用という結果を招いている。

これからの日本で、なぜ、木材生産を行う必要があるのか。私は二つの理由があると考えられる。一つはすでに述べてきたように、国土の7割を占める森林は、「過剰な利用」でも「過少な利用」でも、河川を通じて私たちに災いをもたらす可能性が高まるからである。現状は「過少な利用」であるから、利用を増加させなければ「適度な利用」にならない。木材を買って使えばいいということだけではなく、自分の住んでいる地域の上流域で生産された木材を選んで買うことが必要となる。もう一つの理由は、歴史と文化の継承である。日本の長い歴史の中で、日本が木の国でなかったことがあっただろうか。現在のよう、木を使わない暮らしは、歴史上かつてなかったことである。木を使わない国民は日本人といえるのか、全国民が一度、立ち止まって、よく考える必要があるだろう。歴史と文化の継承にはお金がかかる。公的資金を投入する根拠ともなるし、個人や企業が出資する価値のある理由にもなりうるのである。

自分の住んでいる地域の上流域で生産された木材を選んで買うことは、地域の安心・安全を確保し、歴史・文化の継承にもなる。このことを理解した消費者が、自分の住んでいる地域の上流域で生産された木材を容易に選んで買えるよう、ありとあらゆる手段を使って、流域全体を山から川、まち、海までスギダラケにしていくことが求められている。